

250

明治三十四年七月發行

阿波國文明小史
一卷

德嶋

黑崎靜壽堂發兌

1001/29

友人廣島秀太郎氏阿波國文明小史ヲ著ス編成テ序
 ヌ余ニ徵ス受テ之ヲ讀ムニ歷々據ル所アリ亦有用
 新著ト云フ可シ抑モ邦人ノ史ヲ編ムヤ往々模範
 漢史ニ採レリ而テ漢史ニ記事本末體アリ編年
 體アリ各其趣ヲ異スト雖モ之ヲ概スルニ唯ダ帝
 王ノ記錄英雄ノ興亡戰鬥ノ勝敗又天變地異又豊凶
 雜稔等ヲ載スルニ過スシテ所謂歴史ハ社會ノ古今
 ニ涉レル諸般ノ大記錄タリト云フニ至リテハ之ヲ
 釋ント欲スルモ邈トシテ探ルニ由ナシ夫レ此ノ如
 クニシテ古往ニ攷ヘ今來ニ鑑ントスルモノ何レニ
 在ルヤ余曾テ歴史論ヲ草シテ曰ク物アレハ必ス本



未アリ隆替アリ其本末ヲ知り其隆替ヲ詳ニシテ進
歩改良ニ資セシムルモノ一トシテ歴史ニアラザル
ハナシ夫ノ舟車ヲ行ルニ專ラ筋力ヲ用ヒシモノ今
ハ則チ蒸氣力ヲ役スルニ至ルハ舟車ニ於ル歴史中
ノ大革命ナリ夫ノ音信ヲ通スルニ專ラ書牘ヲ用ヒ
シモノ今ハ則チ電話電信ヲ用ユルニ至ルハ音信ニ
於ル歴史中ノ大革命ナリ然レモ此ノ如キハ抑モ末
ノミ惟フニ今十九世紀ノ人事百般ニ就テ古今相異
ナルモノ有ルヤ霄壤實ニ啻ナラザル也此總歴史中
ノ總沿革ヲ詳ニシ歴史ノ歴史タル面目ヲ保タシム
ルモノ文明史ヲ措テ豈他アラシヤ惟フニ阿波國今

日ノ文明ヲ致シタルモ亦今日ニ始ルニアラスシテ
固ヨリ由テ來ルノ起原アリ洵ニ能ク其起原ヲ知り
益ス阿波國ノ文明ヲ將來ニ進歩大成セシムルハ此
編ノ如キモノヲ捨テ、夫レ可チラシヤ余ハ故ニ言
フ此編實ニ有用ノ新著ナリト而レモ余ハ尙ホ望ム
氏ニシテ余ガ言ノ妄ナラザルヲ世ニ證セント欲セ
ハ刻苦勵精博ク材料ヲ蒐輯シ又其眼孔ヲ活大ニシ
更ニ阿波文明全史ヲ草スルノ舉アラシヤ果シテ
然ラバ氏ノ澤ハ其浹洽豈尠少ト言シヤ余ハ疎懶ニ
シテ人ヲ責ムル酷ダ刻ナルガ如キモ友誼ノ存スル
所一言セザルヲ得シヤ聊カ所思ヲ述ヘテ序文トス

時明治廿四年五月於鳴門新聞社故紙堆裏
東洲迂史 吉田章五郎識

緒言

地理ニ府縣地誌アリテ歴史ニ府縣史ナキハ余ノ夙ニ憂
ル所ナリ會明治廿一年七月小學教科書用阿波國地理編
纂ノ委員ヲ命セラル爾來之ニ從事スルノ際當國ノ沿革
ニ關スル諸記録ヲ閱スルト多シ此ニ於テ宿昔ノ志再ビ
發ス乃チ一々之ヲ別記レ併セテ當國ノ歴史ニ關係アル
新古ノ典籍ヲ涉獵シ以テ本編ノ材料トス然レ共搜索周
カラス又其事實ノ正鵠ヲ失スルモノアルヲ免レズ大方
ノ君子幸ニ訂正アレ
日本歴史ハ本幹ナリ阿波國史ハ枝葉ナリ故ニ當國ノ沿
革ニ直接ノ關係ナキモ本邦全般ノ大勢ニレテ當國モ亦
其影響ヲ蒙ルモノハ捨ルヲ得ズ幸ニ蛇足ヲ答ムル勿レ

年月ニ關係アルモノ及ビ年號ノ下ニハ必ズ紀元年數ヲ
注シ以テ時代ノ遠近ヲ明ニス
卷末ニ古跡地名等ノ考證ヲアツ然レ共從來先輩ノ說ヲ
主トシテ敢テ私意ヲ加ヘズ好學ノ士幸ニ實地ニ徴シ其
正否ヲ判セヨ

編者識

阿波國文明小史上卷目次

第一編

第一章

總論

附

第一丁

國ノ位置 地勢及ヒ其變遷 人事ノ沿革
時代ノ區分

第二章

上古史國造時代

第八丁

神武帝ノ東征 忌部氏ノ國造 國郡ノ區別
阿波君ノ國造 長ノ國造 制度風俗 交通
殖民

第二編

中古史國司時代

第一章

新制度

第廿二丁

改革ノ源因 制度 阿波ノ國司

第二章 佛教 第卅四丁

佛教ノ渡來 古代人民ノ思想 國分寺ノ建立 佛教神教ヲ歴ス 僧空海 佛教ノ利害

第三章 文學ノ渡來 國學 學校ノ所在 生徒ノ資格 結果 第四十三丁

文學ノ渡來 國學 學校ノ所在 生徒ノ資格 結果

第四章 田租及ヒ農產物 生業及ヒ織物 器具 道路及ヒ交通 驛名 神社 板野郡ノ戶籍 中古各郡ノ鄉名 第四十七丁

田租及ヒ農產物 生業及ヒ織物 器具 道路及ヒ交通 驛名 神社 板野郡ノ戶籍

第五章 蒙古族ノ起リ 第六十三丁

蒙古族及ヒ武人ノ由來 國司ハ兵馬ノ權ナシ

國司治下ノ紛乱 阿波ノ強盜

第六章 藤原純友ノ乱 第六十九丁

乱ノ原因 藤原國風淡路ニ走ル 櫻間直行 國風ヲ援ク 結果

第七章 豪族田口氏 第七十四丁

藤原氏衰ヘ武家盛ナリ 田口氏平氏ニ屬ス 藤原師光之ニ反ス 源義經勝浦ニ上陸ス

豪族源氏ニ下ル 付祖谷山誌

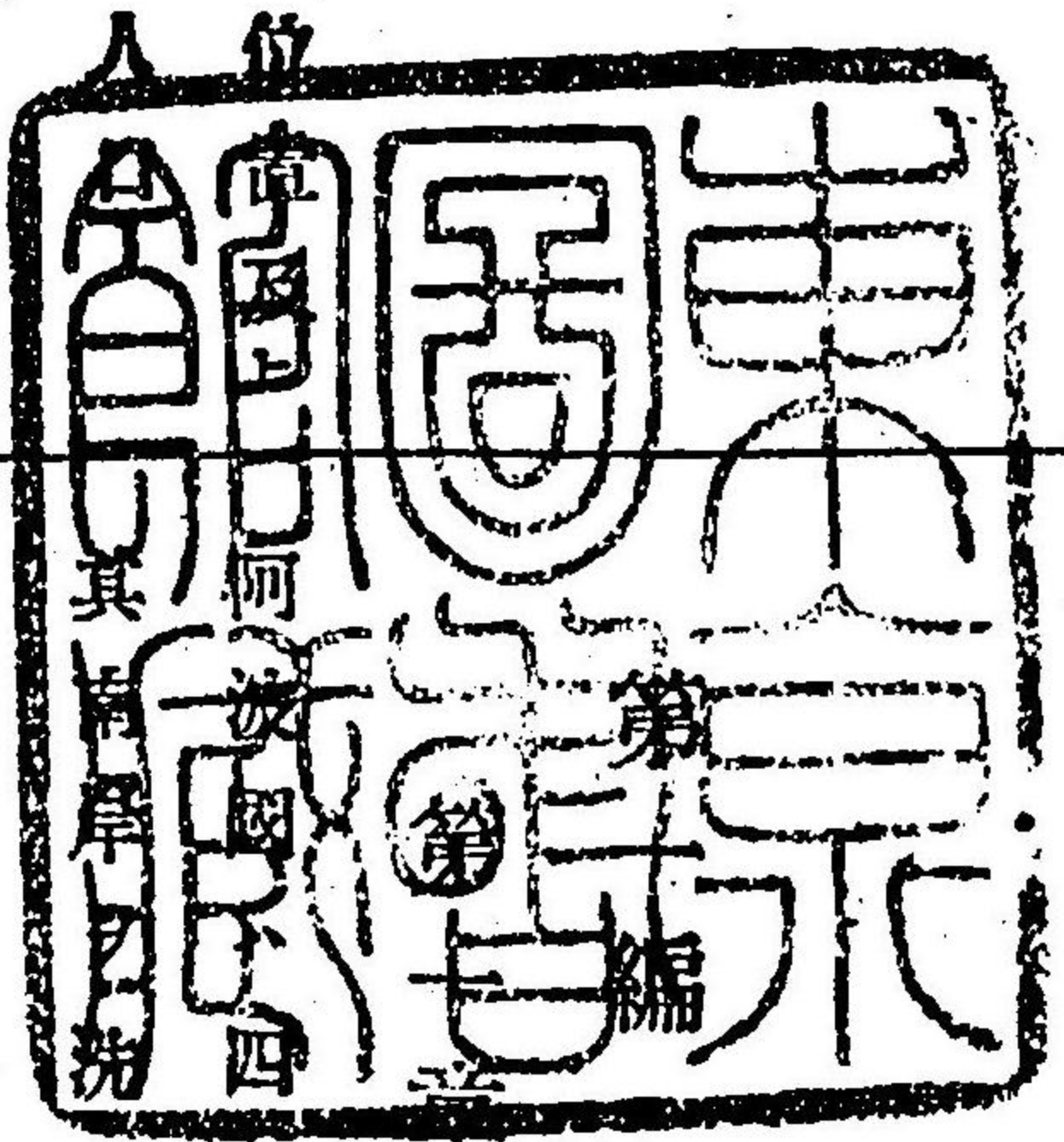
第八章 地名考証 第八十四丁

第九章 古跡 第九十三丁

第十章 年代表 第百十三丁

阿波國文明小史 上卷

廣嶋秀太郎著



總論

論

國ノ位置、地勢及ヒ其變遷、人事ノ沿革、時代ノ區分、

ノ一角ハ渦卷ク鳴門ニ由テ淡路嶋ト僅ニ一葦ノ海峡ヲ隔テ西北ハ山脉相繞リテ伊豫讀岐ニ接シ西南ハ山又山ヲ以テ土佐ニ接ス地形ヲ名狀スレハ大約四邊形ヲナシ面積二百餘方里此

地勢

中ニ六十八万餘ノ人口ヲ包有ス
山岳三面ヲ圍ムヲ以テ地勢又自然ニ東海ニ傾
キ三條ノ大山脈東ニ並ビ走ル即チ北方山脈ハ
贛岐トノ境ヲナシ中央山脈ハ國ヲ南北ニ兩分
シ劔山其胸ニ當リ七千尺餘ノ峻嶺ヲナシ巍然
トシテ四州ヲ睥睨スルノ姿勢アリ其南ナルヲ
南方山脈トス
斯ク山脈ノ東走スルニヨリ谿谷モ亦之ニ隨ヒ
吉野川、那賀川、勝浦川等ノ大河皆東シテ海ニ朝
ス此諸川ハ舟楫ノ便灌溉ノ利共ニ宜ク各流域
ノ地ハ沃野相連リ氣候温和ニシテ物産豊裕ナ
リ就中吉野那賀兩大河ノ流域地ハ彼ノ「ナイル」

地勢ノ變遷

黄河ト一般イト古キ時代ヨリ人間ノ活劇場ニ
シテ阿波ノ歴史ハ即チコノ舞臺ニ現レシ諸顯
象ヲ以テ多シトス
二千五百有餘年ノ昔ニ遡リテ之ヲ見ル片ハ大
ニ今日ト相異ナル處アリ凡ソ吉野川ノ如キ大
河ノ混々トシテ晝夜ヲ舍テズ海ニ至ルト同時
ニ上流山谷ノ崑石ヲ磨滅シ砂礫ヲ移積スルハ
其得意ノ仕事ナリ且急奔激走スルニ方テ苟モ
之ヲ障碍スルモノアレバ遂ニ之ヲ決潰スルハ
其固有ノ性質ナリサレバ遺跡口碑ニ依テ考フ
ルニ二千有餘年ノ大古ニ在テハ今ノ麻植郡ヨ
リ東ノ流域地ハ水濱ノ沙原ニシテ菴葦叢生シ

風波時々起リ逆卷ク怒潮耳ヲツキ人類ノ安居
スベキ處トハ思ヒモヨラザル有様ナリレナラ
ノ故ニ當時ニ在テ我等祖先ノ栖息セシ地ハ中
央山脈ノ山腹及麻植地方ナル谿谷邊ナリレト
思ハル是ヨリ歲月ヲ重ヌルニ隨テ吉野川ノ堆
土次第ニ東進シ沃野東開スルト共ニ人民ノ繁
殖モ亦東ニ移リ住ミシト必セリ
南方那賀川ノ流域地モ亦同様ノ變化アリ且ツ
此地ハ大古長ト稱シテ別ニ一國ヲナセリコレ
當時ハ中央山脈ノ東端ハ海水中ニ突出ノ無情
ノ波濤山骨ヲ洗ヒ南北兩地ノ交通ハ今ノ如ク
海岸ヲ車ニテ往來スルノ愉快ハ夢ニダニ知ラ

人事ノ沿革

サリシコナルヘケレバ地勢上自ラ然リシナリ
更ニ進ンテ人事上ノ沿革ヲ概言スレバ神代草
昧ノ氣運開ケテ神武天皇ノ鼎ヲ中原ニ奠メ玉
フノ日ニ當テ阿波國ノ造^{ミヤツク}ハ天ノ日^ヒ怒ノ命トイフ
當時ハ只麻植地方ニ人民漸ク繁殖セシト見ユ
而シテ子孫漸ク衰ルニ及ビ一千七百五十年ノ頃
皇族長田別ノ命阿波ノ君トナリ府中ニ國廳ヲ
開キ初テ廳舎ノ体裁ヲ備フ爾來其裔國ニ當ル
ト三百餘年其後ハ國司ノ年限ヲ定メテ京師ヨ
リ交代シ政ヲ執リ行ヘリ此頃ハ地方制度モ大
ニ備ハリ且大平既ニ長ク漸々文明ニ進ミシガ
中古盜賊屢起リ人民ノ財產安全ナラズ加フル

ニ豪族又漸ク頭角ヲ見ハシ人民ノ苦痛日ニ増セリカク塗炭ノ中ニ日ヲ送リシガ天下武家ノ世トナリテ小笠原氏四州ノ守護職(七百年前ノ頃)トナリ信濃ヨリ移リテ三好郡大西ニ治シコレヨリ國內復靜カナリ

足利時代ノ初ニ(五百五十年前ノ頃)四國ノ管領細川氏勝瑞ニ館ヲ構ヘ爲ニ板野地方ハ繁昌セシカドモ其末ニ至リテハ却テ其幕下ナリシ三好氏當國ノ兵馬ヲ以テ中原ニ攻入リ當時ノ武勇ハ天下ニ振ヘリ三好氏僅ニシテ衰ヘ國復大ニ乱ルニ及ヒ長曾我部元親土佐ヨリ侵入シ諸城ヲ陷レ國中一時之ニ歸セシカ豊臣氏ノ四國

時代ノ區分

征討アリテ遂ニ蜂須賀氏ノ封國トナレリコレ三百年前ノ頃ナリ爾來田野開ケ工業起リ交通商業亦盛ニシテ人民太平ノ澤ニ浴ス然レトモ當時ハ封建制度ノ弊トシテ武士ト平民ノ階級アリ苟モ平民ノ家ニ生レタラソニハ高才疾足ノ者ト雖モ此階段ヲ昇ルヲ得サリシカ武人ノ榮花モ夢醒テ明治文明ノ今日ハ公侯宰相焉ソソ種アツク立身出世ハ其人ノ力次第ナル愛度御世ト豹變セリ

以上ノ沿革ヲ大別シテ四トス上古、中古、近古、近世、是ナリ上古ハ國造時代ニシテ紀元元年ヨリ大凡千三百年ニ至ル中古ハ國司時代ニシテ千

三百年頃ヨリ千八百五十年ニ至ル近古ハ武家時代ニシテ守護職、細川、三好ノ三時紀トシ一千八百五十年ニ起リテ二千二百五十年ニ終ル近世ハ其後ヨリ明治ノ今日ニ至ルマテニシテ蜂須賀時紀及ヒ明治時紀ナリトス以下ノ各章ハ此ノ區分ニ從テ順次説述セリ

第二章 上古

國造時代

神武帝ノ東征。忌部氏ノ國造。國郡ノ區別。阿波君ノ國造。長ノ國造。制度風俗。交通殖民

神武帝ノ東征
今ヨリ二千五百有餘年前ハ野蠻ノ土人各地ニ割據シ四海渾沌長夜ノ眠リハ未タ醒ス此時ニ當テ我神孫ハ西國ニ降臨シ神武帝ニ至リ師旅ヲ整ヘテ東征シ王師ノ過タル所土蕃醜類風靡

忌部氏

セザル莫ク今ヨリ二千五百五十年前都ヲ大和ニ定メテ天下初テ一統ノ君ヲ見ル帝乃チ天富命ニ詔シテ曰ク爾天富命日鷲命ノ族ヲ率ヰテ粟ノ國及ヒ東國ニ至リ肥エタル地ヲ求メテ楮麻粟ヲ植エ以テ衆庶ニ衣食ヲ給セヨト是ヨリ先キ日鷲命ノ家ハ既ニ當國ノ君長タリシニヤ神武帝東征ノ御船鳴門ヲ過グル片命迎ヘテ帝ニ從ヒ中原ヲ征シ功ヲ奏ス此ニ至リテ此詔アリタリ日鷲命ハ即チ忌部氏ノ祖ニシテ天富命ハ忌部太玉命ノ孫ナリト云フ此ニ繇テ日鷲命ハ一族ヲ從ヘ東國所々ニ國造トナリ其地ノ當國ニ似タル所ヲ安房ト名ケテ

政簡ナリ

レタリ蓋當國ハ命及ヒ其子孫世々國造トナリ
テ開化ノ先導者タリシヲ殆ソド七百餘年麻植
地方ヲ以テ其治處トス後忌部氏ノ一族ハ世々
祭儀ヲ司ドリ近古ノ末ニ至ルマデ當國ノ名族
タリ(古跡參看アルヘシ)
當時ハ人民醇樸ニシテ政事甚ダ簡ナリ即チ國
造ハ唯民ニ神ヲ敬シ各其業ヲ勵ムテ誼嘩口論
ヲ禁ズル等ニ止リテ或ハ教導者トナリ或ハ立
法者トナリ或ハ裁判者トナリテ諸事ミナ一身
ニ集ルモヨク之ヲ處理スルニ足リ制度法律ノ
設ケ少ク國郡町村ノ別モ明カナラス所謂無爲
ニシテ化セシ有様ナリシ然レモ社會ノ整頓漸

國縣邑里ノ區別

ク緒ニ付キ人民各堵ニ安ソシ人口ノ増殖愈多
ク殖民ノ範圍漸ク廣マルニ及テハ昔日ノ如ク
ニテハ治メ難キニ至レリ故ニ七百九十五年即
チ第十三代成務帝ノ五年ニ國縣邑里ノ區別ヲ
立テ國造稻置ノ官制ヲ定メ一人ノ稻置ハ民戶
八十ヲ治メ一人ノ國造ハ十人ノ稻置ヲ統フルノ
職制ヲ定メ制度稍備レリ又此時粟國ヲ阿波ノ
國ト更メタリ
斯ク地方政治ノ擴張スルニ及テハ一小政關ノ
ヨク統理スル所ニアラス故ニ中央政府ヨリ皇
族長田別命日本武尊王子下國マシマシテ今ノ
名東郡府中(古跡ノ部參看)ヲ鄙ノ都トシ以テ一

長田別命

國ノ政治ヲ執リ玉フ之ヲ阿波ノ君ト稱ス命ノ子孫亦國ニ當ルテ六百餘年其間ノ沿革興廢ハ文献ノ徵スベキモノナシ蓋シ昇平無事ニシテ開化増々進ミレナラシ

南方

長ノ國造

今更ニ進ンテ南方即チ那賀川ノ流域地ヲ見ルニ中央山脉ノ東半ハ高峻ナラザルガ爲メニ北方ヨリ漸々人民ノ移住シテ亦タ一國ノ狀ヲナセシモノナラシ舊事記ニ曰ク志賀高穴穗ノ朝カラセノスツキ韓背足尼ニ長ノ國造ヲ賜フト志賀高穴穗ノ朝トハ成務帝ノ朝ニシテ紀元八百年頃ナリ是ニ由テ上古ハ南北二國ニ分レタリト雖モ合シテ一國トナラシハ何レノ世ナリヤ明ナラズ然レ

共千三百年頃ニハ既ニ合シテ一國トナリシナラシカ

小杉楳邨翁曰ク上古ハ殆ソド封建ノ勢アリ何レモ國造ト云フ職ヲ世襲シタリ阿波國ハ上古之ヲ兩分シ今ノ板野、阿波、麻植、美馬ノ各郡ノ地ヲ粟國ト云ヒ粟オクノアタハ凡直ト云氏人即チ忌部神ノ子孫其職ニ從事シ今ノ名東、名西、勝浦、那賀ノ各郡ノ地ヲ長ノ國ト云ヒ長直オクノアタハト云氏人即チ大己貴神ノ子孫其職ニ從事シテ各部下ヲ治メタリ此大己貴ノ子孫ハ木ノ國今ノ紀伊ナリ播磨國ノ中ヨリ來リテ此地方ヲ經營セルナリ云々

忌部氏ノ一族ハ夙ニ農桑ノ業ヲ傳ヘ男子ハ田
 ヲ耕シテ稻粟ノ類ヲ作ル女子ハ楮皮ヲ晒シ木
 綿トナシ以テ織ル之ヲ阿良多間ト曰フ今ノ太
 布即チ是ナリ質ノ子音ナレハ轉セシナラシ
 古代ノ人民ハ之ヲ以テ服トナセシナリ今麻植
 郡ノ高越山ヲ黃木綿麻山ト云フ蓋シ此地方ヨ
 リ此種ノ織物ヲ出セシニ由ルナラン
 忌部氏ハ此太布ヲ製シテ上古ヨリ神服ニ供セ
 リ故ニ京師ニ大祭アルキハ官府ヲ下シテ之ヲ
 進メルムルイ中古ノ後マデモ永續シタリト見
 エ麻植郡三木村三木氏所藏ノ古文書中ニ左ノ
 官府アリ

左辨官下ス阿波國應早令織進荒妙御衣事
 右權大納言藤原朝臣實泰宣奉勅大嘗會主
 基所料宜仰彼國依例以忌部氏人令織備附神
 祇官之使早以進上者國宜承知依宣行之會期
 有限不得延怠
 永仁六年九月日(一千九百五十八年)
 右大史中原朝臣右少辨藤原朝臣
 古代一般ノ服制ハ筒袖ニシテ丈々短キモノヲ
 着ケ下ニハ褌トテ今ノ股引様ノモノヲ穿ツ襟
 ハ左衽ニテ紐ニテ結ビタリ而シテ貴キ者ハ手
 足ニ金銀或ハ寶石ニテ造レル環ヲ穿チ或ハ鈴
 ヲ着ケテ裝飾トナシ種々ノ寶石ヲ緒ニ貫キテ

頂ニカク胸部ノ飾トセリ男子ハ劍ヲ帶ヒ弓箭ヲ携ヘテ歩行ス而シテ人死スルキハ其平生服用スル所ノ者ヲ共ニ埋ム故ニ北方山中ニテ近時發見スル所ノ古塚ニ此類ノ異物多シ然レ共九百年代朝鮮ト交通以後吳國ヨリ女工渡來シ神服ヲ織ルガ爲メ當國ニ來リ忌部氏ニ屬シテ支那風ノ女工ヲ得ベシト云フ今ノ麻植郡地方ニ神代織ト稱スル織物ノ傳ル抑モ源淵スル所アリ

故老曰ク上古此女工ノ居ル地ヲ吳島ト云フ其本國ノ名ヲ取ルナリ而シテ今ノ麻植郡上下島ハ其遺跡ナリ章体ノ吳ノ字ハ草体ノ上

下二字ノ相联接シタルモノニ似タルヲ以テ後世誤リテ上下島ト書スト蓋シ此類往々之レアリ

應神帝以來ノ諸帝ハ支那風ノ衣服ノ都雅ナルヲ愛シ之ヲ獎勵シ玉ヒ况ソヤ當國ハ直ニ其法ヲ學ビ其風ヲ見ルモノ豈多少ノ影響ナカラシヤ今日ノ長袖ノ服ハ流ヲコ、ニ汲ムモノカ抑モ日本ハ環海ノ國ニシテ神代ヨリモ朝鮮地方トノ交通アリシヲ見レバ航海ノ業夙ヨ開クタリシヤ明ク且ツ其國勢ハ許多ノ星羅散布セル島嶼ノ集合体ニシテ彼我ノ交通ハ必ズ舟楫ノ利ニ賴ラザレバ他ノ方便ナシ此必用ハ則

交通

殖民ノ南進

チ更ニ航海ノ業ニ一大刺衝ヲ與ヘ益々之ヲ進
歩セシメタルナリ此ニ依テ當國紀元前ノ人民
モ既ニ此道ニ熟シタリシニヤ彼ノ神武帝東征
ノ時ニ日鷲命ノ海路ノ案内者ヲ帝ニ獻セシヲ
見テモ知ルベシ故ニ對岸ノ淡路トノ交通ヲ首
トシ上方地方トモ上古ヨリ既ニ交通セシヤ疑
ヲ容レズ
隣國トノ交通ハ讃岐ヲ最モ多シトス神武帝創
業以來九州地方ノ土人ノ反服常ナラズ從テ中
原ト九州地方トノ往來ハ頻繁トナリ其道筋ハ
則チ瀬戸内海ニシテ讃岐ノ海岸ヲ過グルヲ以
テ其地ハ東西ノ咽喉ニ當ル故ニ景行帝ノ頃

收稅

ヨリ殊ニ此地ニ意ヲ用ヒ玉ヒテ其備ヲナセリ
サレバ讃州地方ノ人口増殖ハ當國ノ比ニアラ
ザリシナル可シ此人烟増殖ハ必ズ其跡ヲ南進
セシメテ更ニ樂土ヲ求メントスルナリ然ルニ
阿讃兩國ノ界ハ連山アリト雖モ甚ダ險峻ナラ
ザルヲ以テ隨所稍卑キ峠アレバ殖民ノ南進ニ
著シク障害ヲ與フルモノアラズ然シテ此一帶
ノ山脉ノ南部ハ廣ク且ツ豐饒ナル吉野川ノ沃
野アレバ之ヲ見ルノミナラズ垂涎シテ當國ニ
移住セシナルヘシ
收稅ハ概チ其土地ニ産スルモノ若クハ之ヲ以
テ製シタルモノナリシガ紀元一千百二十一年

(崇神帝ノ十二年)ニ男女ノ調役ヲ課シ男ハ弓^ユ矢^ヤノ調、女ハ手^タ末^マノ調ヲ貢セシムコレ獸皮、獸角、魚類、猪、木綿等ノ織物ノ類ニシテ以前ノ貢ノ外ニ上ルモノナリ又朝廷ノ御供ニ充ル爲メニハ皇室所有ノ土地アリ之ヲ屯倉^{ミヤクラ}ト云フ那賀郡ノ宮倉ハ其遺跡ナリト云フ屯倉ノ田ヲ耕作スルモノヲ田部ト云フ朝廷ヨリ官人ヲ遣シテ之ヲ治メシム之ヲ屯田司ト云フ

粟ノ落穂ニ曰ク日本書紀安閑天皇ノ二年五月丙午朔甲寅(一千百九十五年)阿波國春日部ノ屯倉ヲ置ク云々ト此ノ屯倉何所トモ知ル可カラズトイヘド板野郡矢上村ニ春日ト云

フ地アリテソコニ春日明神ヲ祀レリ又社ノアタリニ楠木ノ大木アリモシ屯倉ノアリシ所ナクシテ春日部ト云フニヨリテ春日明神ヲ祭リタルナラソカ其外ニ據モナケレド古キ楠木ハコレカレアレドカ、ル大木ハ御國ウチニアルトナシイカサマニモユエアル古キ地ナルベシ又此アタリノ地名ヲ春日ト云フモ春日明神ノ坐スニトリテイヒ出シ地名ニモアラデフルクヨリイヘル地名ナルヘシ云々ト

第二編 中古史
國司時代

改革ノ原因

第一章 新制度

改革ノ原因。制度
阿波ノ國司

神武帝一統ノ時諸國酋長ノ歸順シタル者ハ大抵其本領ヲ安堵セシメ其國ノ造ニ拜セシメシヨリ以來地方官ハ勢力年ト共ニ積リ近世ノ大名ノ如ク代々土地人民ヲ私有シテ各隨意ノ政ヲ施レタリ故ニ日本國中同一ノ仁政ニ浴セザルノミナラズ事情互ニ隔絶シ交通不便ニシテ國步逡巡ノ姿ナリキ而シテ廣堂ノ内ヲ窺ヘハ亦權臣ノ土地人民ヲ私有シテ驕奢ニ流レ其弊遂ニ蘇我ノ入鹿ノ如キモノアルニ至ル此レミナ内外共ニ其官其權ヲ世々ニスルヨリ來ルノ弊ナリ是レニ依テ天智天皇藤原ノ鎌足等ノ名

制度

君賢相大ニ之ヲ憂ヒ乃チ唐ノ制度ヲ參酌シ當時ノ事勢ヲ商量シテ紀元一千三百五年即チ孝德帝ノ大化年中ニ一大改革ヲ行フ爾後ノ諸帝モ其不足ヲ補ヒテ漸ク觀ルベキノ制度トナレリ今其大要ヲ舉クレバ左ノ如シ
内ニハ堅固ナル中央政府ヲ建テ外ハ郡縣ノ制ヲ設ケ從來ノ文武官及ヒ地方官ノ領田ヲ廢シ全國ヲ總テ公地公民トシ分テ六十餘國六百餘郡一万三千餘郷トシ一郷ノ民戸ヲ五十ト定メ四十郷ヲ大郡トシ卅郷以下四郷ヲ中郡トシ三郷ヲ小郡トシ郷長郡司國司各一人ヲ置キ郡ハ郷務ヲ統ベ國ハ郡務ヲ統ベ以其部民ヲ治メン

當國ノ郷
郡數

郡ニハ主政主帳ヲ置キ國ニハ文武帝ノ而シ
時ヨリ守介、椽(シヨフ)目(サクソ)ヲオク
テ此等ノ官吏ハミナ食封ヲ賜フナリ
此制度ヲ布カレシ時當國ノ郡數郷數ナドハ
記録ニ見エオト雖此之レヨリ二百四五十年
後ニ見レシ和名抄ニ載スル所ノ者ト大差ナ
カルベシ蓋シ地名等ハ容易ニ變動ナキノ
ナラズ古代ノ人民ハ百事變革ヲ好マザルガ
故ニ上古ノ縣ノ名ハ中古ノ郷名ト名ヲ異ニ
シテ其實ヲ同フスルモノアリ今和名抄ニ據
テ之レヲ考フルニ當國郷數ハ四十許郡ハ名
方、板野、阿波、麻植、那賀ノ五ニシテ何レモ中郡
ナリ而シテ一郷ヲ五十戸ト定ムル片ハ大凡

班田法

二千戸餘ナリシナラソ
天下既ニ公地公民トナリ又今ハ之レヲ收授
スルノ法ヲ云ヘバ凡ソ田長サ三十步廣サ十
二步即チ三百六十步ヲ一段トシ十段ヲ一町
トシ男女六歳ニ至レバ口分田トテ二段ノ田
ヲ以テ男子一人ニ給シ其三分ノ二即チ一段
ト百二十步ヲ女子一人ニ給シ六年毎ニ戸籍
ヲ改メ戸口ノ増減ヲ調査シテ死亡者ハ其田
ヲ納メ六歳以上ニ至ルモノニハ新ニ田ヲ給
ス之ヲ名々テ班田收授ノ法ト曰フ其主意ト
スル所ハ從來ノ如ク妄ニ多クノ地面ヲ兼併
スル者ナク又不足ノ者ナク民ノ家産ヲ平均

租調庸

スルニ在リ又其中ニ地味瘠セテ毎歳耕種スルニ堪ヘザルモノアレバ易田トテ倍增ノ田ヲ給シ隔年ニ耕種セシム此口分田ハ管ニ良民ニ給スルノミナラズ奴婢ニモ亦之ヲ給セリ其額ハ良民ノ三分ノ一ナリ

租トハ年貢米ノトニシテ初メ孝徳帝田一段ノ稻二束二把一把トハ両手ノ示指ト握指トハヲイフ十把ト定メ玉ヒタリ一段ノ收穫凡ソ五十束ニシテ一束ノ稻ヲ春テ白米五升ヲ得レバ二石五斗ノ中ヨリ一斗一升ヲ年貢トスルノ割合ニテ殆メド收穫ノ二十五分ノ一ニ當レリ白雉三年(一千三百十二年)又減シテ

一束半トナル然レ共文武帝ノ大寶中之ヨリ重クシ玉ヒケレバ慶雲三年減シテ白雉ノ制ニ復サレタリ養老中(一千三百八十年頃)又大化ノ税率ニ復シテ反ニ二束二把町ニ二十二束トナリタリ

爾トハ後世ニ所謂物成及ヒ運上ノ類ニシテ孝徳帝ノ片絹、紬、糸、綿、布等其土地ノ所産ヲ納シム其法男子一人ニテ廣サ二尺五寸ノモノ二尺紬ナラバ絹ト同幅ノモノ四尺布ナラバ又同幅ノモノ八尺ヲ納ムルナリ元明帝ノ和銅七年(一千三百七十四年)増シテ絹紬ハ三尺布ハ八尺四寸ヲ納ムベキトシ元正帝ニ至

兵役

リテハ稻之ヲ重クセリ
 庸モ亦タ夫役人足ノ代リニ納ムル税ニシテ
 即チ免役料ナリ百姓ノ二十一歳ヨリ六十歳
 マデノ間ハ毎歳十日夫役ニ使用サル、ノ定
 メナリシガ其出ルヲ能ハザル者ニハ一日ニ
 布二尺六寸ノ割合ヲ納ム之ヲ庸ト云フ但シ
 納ムベキモノハ布ニ限ラズ他物ヲ以テスル
 モ妨ナシ
 兵役ニハ壯丁三分ノ一ヲ取テ其地方ノ軍團
 ニ入レ軍團ヨリハ一年ノ交代ヲ以テ京ニ上
 番セシメマタ三年ノ交代ヲ以テ邊境ヲ守ラ
 シム京ニ上番スルノ兵士ハ衛士ト稱レ邊境

軍團

ヲ守ル兵士ハ防人ト稱セリ此軍團ハ今日ノ
 鎮臺ニ相似タリト雖モ其兵士ハ今日ノ如ク
 營所ニ屯集シテ日々軍務ニ従事スルニアラ
 ズ平生ハ定マレル常式操練ノ外ニハ農産等
 ニ従事シ只兵籍ニアルヲ以テ徵發ノ命ヲ受
 クレバ即チ發ス而シテ其京師ヲ衛リ邊境ヲ
 守ルニ當ルモノニ至テハ隔日ニ出テ、非番
 ノ日ト雖モ半日ハ操練ニ従事スルナリ又軍
 團ニハ等差アリ其大ナルモノハ千人中ナル
 モノハ六百人以上小ナルモノモ五百人以下
 ニシテ其多少ハ其地ノ宜キニ從テ定ム蓋シ
 當國ノ軍團ハ五百人以下ナリシナルベシ

阿波ノ國司

以上ハ地方制度ノ概要ニシテ此改革以來地方ノ國司ハ定期ノ任限ヲ以テ京師ヨリ交替スルトトセリ然レ共當國ノ如キハ久シク人民ノ奉戴スル所トナリテ俄ニ其權ヲ收ムルモ如何カトヤ思ハシケン阿波ノ君ノ裔更ニ國司トナリテ政ヲ執レリ
大伴實記ニ曰ク昔百濟國ノ福信トイフ者ノ乞ニ應シ救ヒノ人數ヲ募ルル阿波國司阿波真人廣純五百ノ軍勢ヲ引奉シテ彼地ニ至ル云々ト此廣純ハ長田別命ノ後ニシテ此時マデモ國司ニテ政ヲ執レリ此福信ノ援ヲ乞ヒレハ齊明天皇ノ六年ニシテ即チ改革後殆ソ

改革以後ノ國勢
按察使

ト二十年ヲ經タリ
其後孝謙帝ノ天平寶字二年即チ一千四百二十年頃ロニ豐野直人篠原トイヘル人阿波守トナリテ赴任アルマデ繼續シ其後ハ其私領ナル那賀郡海部ノ縣主トナリシト云フ(古跡ノ豐野直人以後ハ國司京師ヨリ定期ノ任限ヲ以テ交代シ來レリ然レ共此制何時シカ弛ミテ國司ノ交代定期ノ如クナラズ或ハ名ノミニシテ赴任ナキモアリ本卷未詳華年表ニ依テ推スヘシ)
今日ヨリ進ソテ改革以後ノ有様ヲ見ルニ天智帝ヨリ以下數代ノ諸帝意ヲ縣治ニ注ギ玉ヒ屢巡察使等ヲ以テ地方官吏ノ能否ト民ノ疾苦トヲ

察セシメ玉フテ屢ナリ即チ

路 迹見 天武帝十四年南海道使者トシテ

國郡司ノ能否ト民ノ消息トヲ視

察セシム

大伴道主 天年三年南海道鎮撫使タリ

巨勢島村 天年十六年南海道使タリ

紀 麻呂 天平十八年南海道鎮撫使タリ

阿部廣人 天平寶字二年南海道使タリ

馬夷麻呂 同 四年同撫察使タリ

高向家主 天平神護二年同上タリ

多治比木人 天平寶字六年同巡察使タリ

百濟敬福 同 五年同節度使タリ

多治比三上 寶龜三年同檢稅使タリ

小野馬養 大寶三年南海道ヲ巡省ス

高 安王 養老三年阿波讚岐等三國ノ按察

使タリ

屢仁政ヲ施

ス

又此間ノ諸帝ハ勉メテ節儉ヲ行ヒ玉ヒシヲ以
テ水旱疾疫等アレバ往々賦稅ヲ免シ玉フ即チ

文武天皇元年阿波讚岐等ノ國飢ウ詔シテ之
ヲ賑給シ又負稅ヲ收ムルコト勿ラレム

天平三年淡路阿波等ノ國租ヲ免ス

天平五年阿波等ノ國旱ニ遭フテ甚シク五穀

登ラズ乃チ詔シテ今年ノ大租ヲ貸シ百姓ヲ

シテ産業ヲ續ガシムベシト

天平寶字六年阿波等ノ飢民ニ賑給ス其外之ヲ零ス

カク屢仁政ヲ行フト雖モ政府ニ於テハ別ニ財政上ノ困難ナク治綱大ニ張テ文弱ニ流レズ武強ニ偏セズ古ヨリ大化ノ新政以來數十年ノ間文物典章ノ美ハ未タ曾テ見ザル所ナリサレ共一張一弛ハ世ノ常ニテ以後復人民ノ苦痛トナルノ萌芽ハ此泰平ノ中ニ兆セリソハ後章ヲ追テ説述セン

第二章 佛教

渡來。古代人民ノ思想。國分寺ノ建立。佛教神教ノ歴ス。僧空海。佛法ノ利害

佛教ハ紀元一千二百餘年欽明帝ノ朝ニ朝鮮國

渡來

古代人民ノ

ヨリ渡リ其以來皇族大臣ノ歸依アリト雖モ未タ民間ニハ念佛ノ聲ヲ聞カズ左レ共上之ヲ信セバ下ヲシテ亦之ヲ信センメント其勸誘ニ手ヲ盡シ一千三百五十年頃天武帝ハ「家毎ニ持佛堂ヲ作ラシメ玉ヒ或ハ佛語ヲ唱ヘサセ或ハ肉食ヲ禁シテ專ラ佛法ノ功德ヲ示シ百方之ヲ獎勵ス然リト雖モ當時國々ノ寺院ハ大抵牛馬群集ノ場所トナリ門庭ニハ荆棘ヲ生シ佛像ハ塵埃ニ埋モノテ僧尼モ無ク菴室等ニ住ル僧尼ハ破戒無恥ニテ俗人ニ異ナラザレハ益信仰スルモノ少シ

カク佛教ノ行ハレザリシハ抑モ故アリ凡ソ世

思想

間ニハ理外ノ理即チ不思議ト云フ事柄多シ而シテ此事柄ヤ人智進歩ノ割合ニ準ジテ或ハ多ク或ハ少シ古代ノ經驗淺ク思想乏シキ人民ニ在テハ今人ノ敢テ不思議トセザルモノモ猶且ツ奇怪不思議トナセリ故ニ日月星辰風雨雷電一ニ以テ不思議ナリトシ自ラ以爲ク天地間ニカ、ル不思議ノ物アリテ吾人ヲシテ或ハ喜ビ或ハ悲シ或ハ怒リ或ハ畏レムルノ怪力アリト而シテ古代ノ人民此怪力ヲ稱シテ「かみ」ト云フ此思想一變シテ威力アル人ヲ稱シテ「かみ」トナスニ至ル況ンヤ此思想ハ神國政府ノ初メヨリ十分ニ之ヲ獎勵シタレハ敬神ノ意益深愈厚

立 國分寺ノ建

クシテ苟モ神ト稱スレハ獸蛇ニサヘモ合掌平伏スルニ至レリ古代土人ノ神ヲ祭ル地ハ陰森タル林中又ハ幽達ナル深山ニシテ獸蛇ノ窟窟ト相并フ故ニ獸蛇ヲ以テ神ト誤ルモ意味ノ土人ニ在テハ深ク咎ムル所ニアラズ然レ共世ノ風潮一變シテ佛教遂ニ日本固有ノ神教ヲ壓倒スルノ時期至レリ第四十五代聖武天皇(千三百八十四年即位シ玉フ)ハ歷代諸帝ノ經營ニ依テ四海承平天下無事ニシテ府庫充實スルノ後ヲ承ク偏ニ意ヲ佛寺ニ傾ク玉ヒ護國滅罪ノ爲メトテ諸國ニ國分寺ヲ建ツ即チ當國ハ矢野ノ國分寺是ナリ此寺ハ國中第一ノ大伽

尼寺

籃ニシテ七重塔ヲ建テ一丈六尺ノ大佛ヲ安置
 ス其寺領トシテ五十戸水田十町ヲ施封ス而シ
 テ必ズ二十ノ僧ヲ置ク此他ニ尼寺アリテ又水
 田十町ヲ施封シ十人ノ尼ヲ置ク
 阿府史ニ曰ク尼寺ハ名西郡尼寺村ニアリテ
 國中尼ノ學問所ナリ寺號ヲ法花滅罪寺ト云
 フ甚大寺ナリシガ此寺純友ノ乱ニ回祿ニカ
 カレリ今ニ瓦地中ニ埋レテ甚ダ硯ニロシ云
 ヲト
 カク國分寺ヲ設ケテ當國ノ寺院及ビ僧尼ヲ管
 轄シ宗教上ノ一政府ヲナシタレバ僧尼ノ勢力
 頗ニ膨張シ漸ク敬神徒ヲ壓セントスルノ事起

リシカバ爲シニ兩派ノ折レ合ヒ惡シカリシナ
 ラシ

靈異記ニ曰ク粟ノ國名方郡(今ノ名東名西)埴
 村(今考フ可ラズ)ニ一女アリ忌部首字ハ多夜
 須古白壁天皇(光仁帝)ニシテ一千四百三十年
 頃ノ代是女法華經ヲ麻植郡蒙山寺ニ寫シ奉
 ル時ニ麻植郡人忌部連板屋彼ノ女人ノ過失
 ヲ舉ケテ以テ誹謗ス故ニ即チ口齒斜シテ後
 ロニ戻レリ云々ト忌部ノ連ハ祭儀ヲ司ル一
 族ノ家ニシテ敬神家ノ領ナリ
 カク神佛兩派ノ折レ合ヒノ惡シキモ一時ニ
 テ佛法徒ノ遂ニ勝利トナルノ氣運至レリ抑モ

日本國ハ門地門閥ヲ尙ブノ風古ヨリ行ハレシ
 ガ中古藤原氏ノ世トナリテハ特ニ盛ナリ故ニ
 高才疾足ノモノアリト雖モ門地賤シクシテ生
 レノ低キ者ハ其驥足ヲ展フル所ナシ然レ共只
 佛門ニ限リ其才其智ノ有ノ限リハ何所マデモ
 立身出世ヲ謀ルベシヤレハ佛門ハ英雄俊傑ノ
 淵藪トナリ此等ノ徒相寄リテ其門ノ擴張盛大
 ニ肝膽ヲ凝ラシ心氣ヲ盡スヲ尋常ノ徒ノ及ブ
 所ニアラズ乃チ一大方便ヲ發明シテ神道家ヲ
 シテ戈ヲ逆マニシテ軍門ニ降參サスルノ手段
 ヲ得タリ此手段トハ即チ本地垂跡ノ說ニシテ
 神ハ佛ノ權リニ化セルモノナリ佛ハ神ノ本体

本地垂跡ノ

說

空海

ナリト說キ從來ノ敬神心ヲシテ巧ミニ念佛心
 ト變セシメタリ彼ノ霍林寺ヲ開キ大龍寺ニ籠
 リ高越山ニ登リシ空海ハ此一大發明者ノ一人
 トモ謂フベキ高僧ニシテ當國ハ此名僧知照ノ
 爲メニ化セラレテ佛法ノ盛大ハ他國ニ勝リテ
 板野郡ノ人ニシテ大僧都傳燈大法師(勝晤俗姓
 ハ凡直)トナリシモノアリ爾來所謂八十八ヶ所
 ノ靈場モ出來テ念佛ノ心餘念ナシ此時代ヲ尋
 ヌルニ空海ノ高野山ヲ開キシハ一千四百七十
 六年ニシテ正ニ嵯峨帝ノ朝ナリ
 カク佛教ノ盛大ニ趣キテ利益ナル所ハ僧侶行
 者ノ山澤ヲ跋渉シテ道路ヲ開キ橋梁ヲ架シ爲

佛法流行ノ利害

メニ交通ノ便益ヲ加ヘシテ少カラズ又寺院ノ建立佛像ノ新調等多キガ爲メニ草深キ田屋ニモ屋瓦高ク豚ムノ高閣ヲ見建築彫刻ノ業大ニ進歩シテ佛像ノ鑄物等當時ノ者ニシテ名作多シ又之ニ伴フ害ハ佛教ノ盛ナルガ爲メ土木亦盛ニ起リテ國用不足シ人民ノ租稅漸々ニ増加シテ空海ノ頃ロニ至リテハ一反五十束ノ平均ニテ其五分ノ一ヲ收メラレタリキモ之ニ諸役上納ヲ加ヘテ算セバ四割ヨリ強カリシナラント云ヘリ新制度發布ノ當時ト比セバ其増加實ニ驚クベシサレド此ノ増加ハ佛教流行ノ爲メノミトモ斷言スベカラズ諸國ニモ乱漸クアリテ費用モ多カリケレバナリ

文學ノ渡來

第三章 文學

文學ノ渡來。國學學校ノ所在。生徒ノ資格。結果

我國文字ノ濫觴ハ紀元九百四十四年應神ノ朝ニ朝鮮國ヨリ支那ノ文字ヲ傳ヘシニアリ爾來彼ノ國ノ學士續々來リテ本朝ノ文學コ、ニ初ル然レ共之ヲ學ブモノハ王族顯臣等ニ止マリテ全國ニ行キ亘ルニアラズ下リテ千六百六十年ノ頃履中帝ノ朝ニ始メテ諸國ニ史官ヲ置キ政治ノ得失ヲ記シ以テ四方ノ志ヲ達セシメシヨリ中心ノ文學ハ諸國ニ分レ初メリ然レ共其最モ文學ノ國々ニ起リシハ元正帝ノ養老年中ニレテ即チ一千三百七十八年ニ國々ニ國學ヲ

國學

置キ其學科ハ經書ヲ主トシ兼テ他ノ普通科ヲ
モ授クルノ處トセリ而シテ國學ハ博士一人ニ
シテ生徒ノ數ハ當國ハ四十八ナリ又國司郡司
ノ經義ヲ解スルモノハ教授ヲ司トシム故ニ
國司ノ如何ニ依テ國學ノ盛衰ニ關スルモノ尤
モ切ナリ當國々司中ニ本邦儒家ヲ以テ名アル
管原清公アレハ其在任中ハ大ニ盛ナリシナラ
シ又當時國學ニアル生徒ヲ教授スル目的ハ士
ヲ取リ官ニ任ズルニアリ人民ヲシテ盡ク教育
ヲ受ケシムルニアラズ故ニ國學ニ入學スルノ
生徒ハ國司郡司ノ子弟ニ止リ共ニ年齡十二歲
以上十六年以下ニシテ性質聰明ナル者ヲ撰ブ

生徒ノ資格

而シテ此等ノ生徒卒業スレバ試験ヲ受ケ其及
第スルモノニハ任官ノ沙汰アリ此國學ハ當國
ニ於テハ國司廳ノ近傍即チ府中ノ近在ナリシ
ナルベシ然レ共阿府史ニ記スルモノ左ノ如シ
或人曰ク昔シ當國那賀郡學原村ニハ學校アリ
シ所ナリ其印及ヒ孔子十哲ノ像モ皆存ス年久
シク同郡荒田野村ニ孔子十哲ニ似タル木像十
体ホドアリ尤モ子路ノ像ハ昔シ同郡仁宇谷相
川村瀧寺ニ小野篁ノ作ナル熈王ノ像ヲ得タリ
是レ則チ荒田野村ニアル十哲ノ内ナリ云々ト
國學ノ制ヲ見ルニ必ズ學校ニハ孔子及ヒ十哲
ノ像ヲ備フルトス余之ヲ古老ニ聞クニ子路

學校ノ所在

ノ像ハ其性質ノ勇氣ヲ表スルヲ以テ之ガ裝飾ヲ變スレハ即チ焔王ノ像ナリト又麻植郡學村ニ小學校ノ遺跡アリ往昔忌部氏ノ盛ナリシ時此地ニ學校ヲ設ケ儒生文章生俗人生等ノ諸國學生ヲ教導セシ所ナリ今ニ此村ニ古ノ樂ノ太鼓ヲ傳フト(以上二件阿府史)之ニ依テ昔時國學ノ在リシコトヲ徵スルニ足レリサテ僧侶ノ教育ニハ國分寺アリ有司子弟ノ教育ニハ國學アリ天下太平ナルマ、ニ頗ル盛大ニ至リシト見エ當國ノ人ニシテ安曇郡粟麻呂ハ寶陽親王ノ家人ヨリ起リテ當國ノ守トナリ貞觀年中ニ板野郡ノ人從五位下粟鱒麻呂ハ

結果

明法博士トナリ延略中ニ粟豐穂ハ國造トナレリサレハ千四百年代ヨリ千五百年代ニ人才學者ノ輩出セシテ推シテ知ルベシ

第四章 延喜頃ノ開化

田租及ヒ農産物。生業及ヒ織物。器具道路及ヒ交通驛名。祠社。板野郡ノ戶籍。中古各郡ノ鄉名。

紀元一千五百六十年ノ頃ハ醍醐帝ノ朝ニシテ其年號ヲ延喜ト云フ此帝ハ當時ノ明君ニシテ之ニ加フルニ管原道真三善清行等ノ賢臣アリテ治綱大ニ張リ諸制度大ニ明ナリ今當時代ニ出來シ延喜式ヲ主トシテ此頃當國ノ開化ノ有様ヲ略記スレハ左ノ如シ

田租及ヒ農

延喜式ニ曰ク阿波國ノ正稅、公廩、各二十万束、國

産物

分寺料一万四千束、文殊會料二千束、修理池溝料
三万束、道橋料五百束、救急料六万束トアリ之ヲ
合スレバ五十万六千束ナリ而シテ一束ヲ米五
升ト算スレバ二万五千三百廿五石ノ貢税ナリ
米ノ外ニ粟、大豆、小豆、麥、胡麻、野菜類ヲ産シ大豆
ヲ以テ醬油ヲ製シ米ヲ以テ酒ヲ醸ス
類聚國史ニ曰ク延曆十九年(一千四百六十年)漂
流人崑崙人ノ賚ス所ノ綿種ヲ阿波讚岐等ノ諸
國ニ殖エシム其法先ツ陽地ノ沃土ヲ撰ビ之ヲ
掘テ穴ノ深サ一寸ヲ作り衆穴相距ル一四尺ト
シ種ヲ洗ヒ之ヲ漬シテ一宿ヲ經明日之ヲ植ウ
一穴毎ニ四ヶ土ヲ以テ之ヲ掩ヒ手ヲ以テ之ヲ

綿

生産

織物

按シ毎日水ヲ注ギ常ニ潤澤ナラシメ芽ノ生ズ
ルヲ待ツト以テ當時ノ栽培法ノ如何ヲ知ルベ
シ而シテ綿ノ種ヲ絶セシハ何時頃ナリシヤ得
テ考フ可ラズト雖モ中古ノ末國內平カナラズ
農業ノ衰ヘシ時ナラシ
生産ハ農耕ノ外ニ各地各其利ニ依テ之ヲ異ニ
ス今ノ板野、那賀、海部ノ海岸ニ住スルモノハ鱈
魚、鰻、海藻、鹿角菜及ヒ雜魚ヲ漁シ海水ヲ煎テ鹽
ヲ製シ魚ヲ乾シテ脯トナシ鰻ヲ以テ鮓ヲ作ル
山中ニアルモノハ弓箭ヲ以テ獸ヲ獲リ鹿皮ヲ
製ス婦女ノ内地ニアルモノハ機織ヲ業トスル
モノ多シ續日本記ニ曰ク和銅五年七月阿波等

ノ國ヲシテ始メテ綾錦ヲ織ラシムト蓋シ當國ハ上古ヨリ女工ノ盛ナリシハ忌部氏ノ遠澤ナリ當時ニ製スル所ノ者ハ綾羅、紬、絹、各色ノ糸、木綿、鹿布等ニシテ此外ニ紙ヲ出ス、カク絹布ノ製作アルガ爲メニハ養蠶ノ業行ハレザル可ラズ麻植郡桑村トハ蓋シ其桑ヲ盛ニ培養セシ地ナラシ

椎野宰資氏曰ク元來本縣即チ阿波國ノ蠶業ハ今ヲ去ル一凡ソ一千有餘年前ハ頗ル盛大ニシテ當國ノ調貢ハ絹糸又ハ織物ヲ以テセシガ絹糸ノ調貢ハ日本國中ニテモ三河國ヲ除ケバ阿波國ヲ以テ其最モ多額ナルモノナ

リトス織物ハ錦或ハ綾羅等ノ種類定リアル一延喜式中ニ記載セラレテ詳ナルヲ以テ知ル可キナリ然ルニ前記ノ如キ阿波國ノ蠶業ガ如何シテ今日ノ如クニ衰頽セシカト謂フニ賴朝幕府ノ時代ヨリ武家政權ヲ執リ武人ハ横行シ調貢ヲ納メザルヲ以テ一般ニ皆自カラ期ノ如ク納マラザルモノアリ終ニ他物ヲ以テ此ノ調貢等ニ代ヘラル、ニ至リシヨリ漸次此業ニ意ヲ注グモノ少ナクナリ加フルニ平將門反逆ノ折柄伊豫ニモ藤原ノ純友ナル者アリテ此謀ニ與ミシ爲メニ人心一定セズ遂ニ戰乱ノ街トナリ農桑ノ業ヲ魁ムル

器具

モノ寡ク且ツ爾來干戈ノ世トナリテ戰乱相
 襲ギ之ニ依リテ國主モ兵事ニ孜々タリシカ
 ハ蠶業ノ如キハ殆ソド跡ヲ絶ツニ至レリ尤
 モ徳川氏治世ノ頃ニハ是等ノ獎勵ナキニア
 ラザリシモ十分ノ發達ヲ來ス可能ハザリシ
 モソナヲ云々

器具ニハ鑿斧、小斧、鎌、鑿、刀、劔、鉤、火鑽ヲ製作アリ
 テ農耕、建築ノ方便備レリ且ツ又鍊鍛ノ技モ既
 ニ熟スルヲ知ルベシ

古代ハ舟車橋梁ノ設ケ乏シク金銀貨幣ノ通用
 モナケレバ往來交通ノ便ヲ欠ケリ紀元千三百
 年代ニ至リテモ役夫等ノ旅行ヲ見ルニ其艱難

道路及交通

驛

甚シク米ト餌トハ携ヘテモ路傍ノ人家ニ就カ
 ザレバ炊ク可能ハズモシ路傍ニテ自由ニ炊ク
 片ハ其地ノ人怒リテ旅人ヲ抑留シテ贖物ヲ出
 サシムルノ風習アリタリ然レ共延喜ノ頃ニ至
 リテハ諸國ニ驛傳ヲオキ其驛ニハ百姓ノ馬ノ
 騎用ニ堪ヘタルモノヲ買ヒ置キ驛田ヲ備ヘテ
 其費ニ供ス當國ニテハ上方トノ交通ハ撫養ニ
 リ板野郡ノ北方山下ヲ傳ヒテ西シ國府ニ至ル
 ノ官道アリテ此間ニ石澁、那頭ノ二驛アリテ驛
 馬各五疋ヲ置キタリシト云フ

延喜兵部式諸國驛傳馬ノ條ニ阿波國、石隈、郡
 頭各五疋云々トアリ延喜式ノ出雲本ニハ石

祠社

隈ヲ石濃ニ作レリサレバ此驛ハ板野郡大谷
 村ニ石園ト云フ地アリソコナルベシ又郡頭
 ヲ京本ニハ那頭ニ作レルヲ見レバ今ノ那東
 村ナルヲ疑ナレ云々
 此官道ヨリ讚岐ニ至ルニハ大坂越ヲナスナリ
 又國府ヨリ土佐ヘノ交通ハ今ノ名東郡ヲ東西
 ニ走ル山ヲ横ギリテ(今ノ阿津伊地越カ)勝浦郡
 賀ヲ經テ土佐ニ入ル又舟ニテハ南方ノ海岸ヲ
 廻リ撫養土佐泊ニ至ルヲ土佐ヘノ海路トス
 延喜式ニ曰ク阿波國大社三座小社四十七座之
 ヲ小別セバ板野郡ニ大一、小三座、阿波郡ニ小二
 座、美馬郡ニ小十二座、麻植郡ニ大一、小七座、名方

戶籍

郡(今ノ名東名西)ニ大一、小八座、勝浦郡ニ小八座、
 那賀郡ニ小七座ナリ今其大社ヲ擧グレバ大麻
 社、忌部社及ヒ天、石門別入倉比賣神社(即チ矢野
 村ノ杉尾社)是ナリ而シテ忌部大麻ノ二大社ヲ
 以テ雨ヲ祈ルノ神トナスト
 延喜二年ノ調査ニカ、リタル粟拾穗集ニ載ス
 ル所ノ板野郡田上郷ノ戶籍ノ一斑ヲ左ニアク
 戶主凡直廣岑 年漆拾陸歲 耆老
 男凡直良直 年肆拾參歲 正丁 仕丁
 男凡直吉安 年肆拾貳歲 正丁
 男凡直秋宗 年參拾玖歲 正丁
 男凡直有行 年貳拾玖歲 正丁

女凡直御黒賈 年肆拾 歲 丁女

女凡直願子賈 年伍拾貳歲 丁女

孫男凡直々美直 年貳拾陸歲 正丁

孫男凡直秋庭 年壹拾壹歲 小子

凡直秋子賈 年陸拾漆歲 耆女

外之ヲ略ス

割去矢田部秀男 年二十 父矢田部橋本年五十九

母 家部後子 年六十一 後母栗荷子女年五十九

祖母物部皆子 年九十一 姊矢田部米子女年三十七

外之ヲ略ス

古二種ノ記載法ニテ凡直、物部、海部、秦、忌部、家部、飛鳥部、服部、矢田部、建部等ノ姓多ク同姓ノ者數

當國ノ郷名

十人ニ下ラズ而シテ一口ノ下ニ包有スル男女

ノ口數亦數十ニ下ラズ

此戶籍簿ハ斷片ニシテ田上ノ一郷ヲモ全カラ

ズト雖モ其中ニ記スル人口ハ九百三十四名ナ

リ今此戶籍ニ依テ推スニ當時モ猶家父一家族

ノ長トナリテ一族ヲ主管スル族長制ノ行ハレ

タルヲ知ルナリ抑モ此族長制ハ何レノ國ヲ問

ハズ其開化ノ幼稚ナル際ニハ一般ニ行ハル、

モノナリ

今序テニ和名抄ニ載スル所ノ當國ノ郷名ヲア

ケノ但シ此書ハ源順ノ撰スル所ニシテ延喜時代

ヨリ五十餘年ヲ經過シテ世ニ出シ書ナレ共古

代舊是レ尙ブノ時ニ在テハ大差ナキヲ信ス
板野郡 九郷

松島 今ノ松村邊ナルベシ

津屋 木津ヨリ吉永、徳永、木津等ナリ

高野 未ダ詳ナラズ

小島 西貞方小島ヨリ吉成、古川、鈴江、上下別

宮ノ數小島ノ地ナリ

井隈 奥野、住吉、矢上、乙瀬、鳴瀬、竹瀬、中富等ノ

地ナリ

田上 詳ナラズ

山下 同上

全戸 同上

新屋 同上

四郷

阿波郡

高井 此地ハ中村ヨリ下日開谷迄ナルベシ

秋月 今ノ秋月ナリ

香美 今ノ香美ヨリ川添、柿原マテナリ

拜林 西林、東林、伊澤、久千田、勝命アタリ

四郷

美馬郡

菱原 拜原、猪尻、脇、岩倉アタリナリ

三次 郡里、重清ノ山分ナリ

大島 穴吹、拜村ナリ

大村 太田ヨリ半田邊ナリ

三郷

三好郡

三繩 毛田ヨリ池田マテノ間

三都 清水ヨリ脇津マテ

三野 白地ヨリ佐野山城等ナリ

麻植郡 四郷

吳嶋 西麻植ヨリ麻植塚、牛島、上浦等ナリ

忌部 宮島ヨリ山崎、別枝、木屋平等ナリ

川島 川島ヨリ山田、東山等ナリ

射立 瀬詰、川田ノ邊ナリ

名方西郡 四郷

埴土 入田ヨリ上山マテ山分ノ地ナリ

高足 高原、中島、覺圓、瀬部、高瀬邊ナリ

土師 天神、芝原、第十、高島等ニレテ管原清公

ノ領土ナリ

櫻間 櫻間、加茂野、一樂邊ナリ

名方東郡 六郷

名方 東西名東、佐古、藏本、田宮、矢三、島田等

新井 南北、新居、和田、岩延、高崎等

加茂 東櫻間、敷地、池尻、井戸、日開、高輪、花園等

ナリ

井上 徳嶋、大岡、助任、富田、福島等

八萬 下町、上下八万、沖濱、津田マテ

榎栗 尼寺、内谷、失野、延命、一宮、佐那河内等

勝浦郡 四郷

篠原 飯谷、生夷名邊

託羅 大谷、西須賀、方上、澁野、波多、宮井等

新居 田浦、新居見、田野、芝生、前原、江田等

餘戸 中田、中郷、小松島等

那賀郡 七 郷

山城 仁宇、和食、山口、荒田野等ナルベシ

大野 上下大野、西方、宮内、岡村、柳島等ナラシ

島根 島尻ヨリ中島、今津邊ナラシ

幡豆 原、西原、古庄、大京原、八幡ノ地ナリ

和泉 荒井上下、今市、石坂、領家ヨリ海邊

和射 宮倉ヨリ坂野、大林、立江、楯淵等

海部 今ノ海部郡ナリ

通シテ四十七郷ナリ郷ハ上古之ヲ縣ト云フ(右

阿府志

第五章 豪族ノ起リ

武人。及ヒ豪族ノ由來。國司ハ兵馬ノ權ナシ。國司治下ノ紛乱。阿波ノ強盜。

武人ノ由來

我國中古ノ半バヨリ武人ナルモノ起リテ遂ニ武人天下ヲ左右スルニ至ル今其由來ヲ考フルニ當時ハ制度ト時勢ハ然ラシムル所ヨリ來ルナリ抑モ大化ノ新制以來一國ノ正丁ヲ三分シ其一ヲ以テ武ヲ講セシメ一年京師ヲ守リ三年邊防ヲ衛ル之ヲ上番ト云フ上番ヲ勤メテ歸郷シタル後ハ又兵役ノ責任ナレ此ノ如キ制ニテ其初メハ事足レリ大平久シク打續キ將卒共ニ危弱トナリテ緩急事アル片ハ克ク之ニ當ル能

豪族ノ由來

ハズ故ニ千四百三十年頃(光仁帝寶龜年中)ノ廷
 議ニ因テ冗兵ヲ沙汰シ富豪ノ百姓其ノ才弓馬
 ニ堪ヘタルモノヲシテ專ラ武藝ヲ習ハシメ以
 テ徵發ニ應セシメタリ是ヨリ兵ト農ハ相分レ
 テ武人ナルモノ諸國ニ出ツ之レヲ健兒ト云フ
 地方ノ豪族其ノ長トナリ事アルキハ健兒ヲ率
 ヒテ軍ニ臨ム
 豪族ハ地方ノ大族ニシテ國造、稻置等ノ後ナル
 モノアリ國司ノ任滿ナテ土着セルモアリテ年
 ヲ累テ代ヲ積ムニ隨ヒテ家富ミ族榮エテ巨萬
 ノ財一身ニ余レルヨリ數多ノ臣僕ヲ養フ之ヲ
 郎党トイフ此ノ輩ハ資産ノ豐饒ナルヲ以テ生

國司ハ兵權
ナシ

産ヲ事トセズ唯數多ノ郎党ヲ率ヒテ山野ヲ遊
 獵スルヲ以テ消日ノ具トナシ常ニ武事ニノミ
 歲月ヲ送ル然ルニ先ニ述ベシ如ク軍團ノ制廢
 シテ諸國ノ健兒兵役ニ募ラル、ニ及ビ豪族ハ
 其長トナリテ群盜ノ追捕叛人ノ征討ニ專ラ任
 シテ遂ニ武士ト呼レタリ當國ノ櫻間田口氏等
 即チ是ナリ
 カク豪族ノ輩出シテ其勢力ノ振ヒシハ當時ノ
 制度又之ガ助ケトナリシナリ即チ當時ノ國司
 ノ職掌ハ戶籍ヲ作り田畝ヲ校ヘ賦役ヲ課シ農
 桑ヲ勤ムル等ニシテ兵事ニ關シテハ兵士ノ名
 簿二通ヲ作り詳ニ征討遠征ノ場所ヲ顯ハシ貧

國司治下ノ

紛乱

富上中下ノ等級ヲ注シ一通ヲ國ニ置キ一通ヲ兵部省ニ送ル又征討上番ノ事アルハ國司ハ右名簿ニ依テ以テ差遣スルノミニシテ兵馬ノ權一モコレナシ
 カ、ル實力ナキ國司ノ治下ニハ千五百年頃ヨリ漸々ニ親王、諸王、貴族、僧侶ノ采地アリ豪族アリ浮浪人アリテ勢家ノ家人ハ國司ニ關セス直チニ采地ニ入リテ租稅ヲ徵シ之ヲ驅役スルヨリ部民ハ課役ヲ免レント謀リテ他國ニ流浪スルアリ又他國ヨリ伴ヒ來ルアリ戶籍紛乱シテ國司賦課ニ苦ムヨリ令ヲ發シテ脫籍ヲ禁ゼントスレバ僧トナリテ課役ヲ免レント謀リ黒衣

人民ノ苦痛
窮マル

ヲ若ルモノ歲月ニ増加シテ津々浦々ヨリ山間僻地ニ至ルマデ充塞シ此黒僧等ハ佛教ヲモ信セス五逆十惡憚ル所ナク人ヲ殺シ貨ヲ竊シ群盜トナリテ海陸ニモ出沒シケレバ國司モ攝關家藤原氏ノ怠惰ヲ利用シテ面倒ナル任國ニ赴カス京ニ留リテ目代ヲ遣ハスニ至レリ是ニ於テ目代亦任所ニテ私利ヲ營ミ下ヲ苦ムサレバ當時ノ人民ハ盜賊ニ遇ハザレバ目代ニ脅ヲ被ラレ目代ナケレハ豪族ニ使役セラル進退コソ谷マリ死スルノ外手段ナシ當時人口ノ減少ハ故アリシナリ以上ハ當時諸國一般ノ有様ニシテ當國モ此風潮ヲ免カル能ハザリシ

前太平記ニ曰ク純友ノ手下ノ賊ノ曰ク我々ハ去ル延喜年中伊勢國鈴鹿山ニテ官軍ニ討レシ山賊ノ首領伊賀壽丸ト申者ノ孫ニテ候祖父討レテ後播磨ニ住テ山陽山陰兩道ノ者共ハ皆我等兄弟ガ下風ニ立ツ者共ニテ候彼等ヲ招カバ大凡五六千人モ候ハソ皆船中ニテ歲月ヲ送リ舟ニ自在ヲ得タル者共ニテ候ヘバ國々浦々ノ案内殘ル所ナク存知仕テ候先ツ當國(伊豫)熊山ニハ澤太郎今張六郎、讚岐國ニハ新宮瀧夜叉、高松ノ鬼九郎、同ク弟熊尾ノ新六、阿波ニハ池田、中村ノ一党土佐ニハ別府、淡路ニ由良、紀伊ノ國ニハ田邊ガ一族三十

源因

七八播磨ノ國法華山ノ袈裟太郎備前ニ射越原、今木、備中ニハ松山ノ荒五郎備後ノ國ニハ尾道六郎、安藝國ニハ金剛十郎、蓬屋四郎、周防ニ關尾ノ梶五郎、長門ノ國ニ萩野勘六、同ク金地丸、梅根父子、杉兄弟、九州ニハ上下松浦、高木熊始、トシテ三道張本百六十三人、其外ノ一類代等党與ヲ算フルニ暇アラズ云々

第六章

藤原純友ノ乱

源因。藤原國風。淡路ニ走ル。櫻間直行國風ヲ援ク。結果。

爰ニ藤原純友ノ乱因ヲタツメルニ藤原氏ハ中古千五百年頃ヨリ外戚ヲ以テ攝政關白トナリ代々天下ノ政柄ヲ握リシガハ他ノ諸司百官モ亦次第ニ世襲ノ姿トナリ門地ノ貴賤ニ因テ職

將門ノ乱

ノ尊卑ヲ立テ氏族ノ高下ヲ見テ位ノ内外ヲ分
チ才智藝能ノ如何ヲ問ハズ地望高キ者ヲ号シ
テ殿上人ト曰ヒ卑キ者ヲ地下ノ人ト曰フ實格
一定復タ動ス可ラズ適マ動功ヲ以テ特選ヲ蒙
ムルモノアレハ衆ミナ之ヲ猜ソテ斥ケテ失典
トナス

一千五百九十一年第六十一代朱雀帝位ニ即キ
玉フニ及ビ帝ノ身体柔弱ナレハ諸事藤原氏ノ
計ヒニ任シテ藤原氏一族ノ威勢朝日ノ昇ルガ
如クニシテ門閥ヲ論ズルト一層嚴シク人才ヲ
擧グルト一層吝ニ他族ヲ拒ムト一層甚シクナ
リ又コヽニ平將門トイフ者攝政藤原ノ忠平ニ

仕フルト多年功勞ヲ以テ檢非違使ニ任セラレ
シトテ請フ將門ハ武藝ノ達人ニシテ此任ニハ
適當ナレ共吝ニシテ許サレハ將門怒テ乱ヲ
東國ニ起シ天下ノ一大事トナレリ而シテ純友
之ント相約シテ東西並ビ起リタリ
純友ハ權中納言長良ノ曾孫ニシテ筑前守良範
ノ子ナリ同シク藤原氏タリト雖モ其縁遠ク父
ハ國守ニ過ギズ已ハ伊豫ノ椽ニ止レハ亦常ニ
不平ノ念抑ヘ難カリシ乃チ將門ト京師比叡山
中ニ於テ陰カニ約ヲ結ビ其任國伊豫ニ赴キテ
任滿ツルモ返ラズ海賊ヲ嘯集シテ承平六年(一
千五百九十六年)遂ニ反シテ海上往來ノ官物ヲ

奪ヒ兵糧ヲ作り進メテ四國ヲ乱暴掠奪スレ共
 東ニ將門ノ反アリテ藤原氏遊惰ノ不慮ニ起リ
 且ツ賊ノ勢盛ナレバ容易ニ南海ニ手モ着カス
 是ヲ以テ純友ハ益慮ヲ得テ當國ヘモ乱入スル
 ニ至ル此時國守ノ代理阿波介藤原國風純友ト
 戰ヒ敗レテ淡路ニ走リテ之ヲ京師ニ訴フ純友
 乃チ國府ニ入リテ火ヲ放チ豪家ヲ掠メ寺院ヲ
 燒キ公私ノ財物ヲ奪ヒ吾阿波國ノ文明ニ退步
 ヲ來ス丁勝テ言フ可ラス國風淡路ニ在テ兵士
 ヲ催シテ讃岐ニ入り以テ官軍ノ到來ヲ待ツ然
 レ共朝廷ニハ征討其人ヲ得ザルガ爲メカ將門
 ノ乱平グルヲ待チ其追討ニ向ヒシ源氏ノ棟梁

國風

櫻間直行

經基ヲ副トシ小野好古ヲ大將トシテ漸ヤク伊
 豫ニ發向セシメタリ
 南海ノ騷乱既ニ四年ヲ過ギテ天慶三年ノ春ニ
 至リ國風當國ノ豪族櫻間文治直行ト共ニ純友
 ト讃岐ノ高松ニ戰ヒ復敗レテ阿讃ノ界ナル山
 中ニ退キ休ス會々當國ノ豪族相尾右馬允資宗
 一族ヲ具シ一千餘騎ニテ國風ノ陣ニ馳セ加ハ
 リ再ヒ純友ト戰ヒテ遂ニ之ヲ敗ル純友遁レテ
 中國ニ入り進メテ九州ヲ掠メ天慶四年五月ニ
 至リ漸ク平ク此乱殆ノド四々年ヲ經タリ其猖
 獗ト賊徒ノ多キ推シテ知ルベシ而シテ此乱ノ
 結果如何ヲ考フレバ文物ハ破乱サレ財貨ハ掠

結果

奪サレ國力大ニ衰ヘ農工商業共ニ退步ヲナス
コト願ル者シ又豪族ノ戦功ニヨリテ其ノ勢力
益加ハリ國司ノ權愈減シ小民ノ困苦一層増加
セリ

第七章 豪族田口氏

藤原氏衰ヘ武家盛ナリ。田口氏平氏ニ屬ス。師光之ニ
反ス。義經勝浦ニ上陸ス。豪族源氏ニ屬ス。付祖谷誌

天慶ノ乱ニ平貞盛ハ將門ヲ亡ボシ源經基ハ純
友ヲ討レ各大功ヲ樹テ兩家武人ノ棟梁タリ爾
來天下多事ニシテ人民ノ疾苦ハ日ニ増セドモ
藤原氏ハ恬トシテ願ミズ只驕リト遊ニ日ヲ送
リ常ニ兩家ノ子孫ヲシテ征討ニ當ラシメケレ
ハ武門ノ榮ヘ日ニ増セリ却テ藤原氏ハ後三條
ナリ

藤原氏衰ヘ
源平兩氏盛

田口成能

帝ノ英主ニ遇ヒ(一千七百卅年頃)テヨリ漸ク衰
兆ヲ顯ハシケレハ今マデ其瓜牙タル源平兩氏
モ去テ王家ノ干城トナリ保元ノ乱(一千八百十
六年)ニ兩氏勢力ノ競争ヨリ遂ニ破裂シテ平治
ノ乱(一千八百十九年)トナリ源氏藤原氏共ニ衰
ヘテ平氏ノ勢天下ニ振ヒ六十餘州ノ内平氏ノ
受領三十餘州ニ至リ而シテ其受領ハ主ニ西南
諸國ニアリコトニ於テ當國ノ豪族田口氏等ハ
ミナ心ヲ平氏ニ屬シ臣妾ノ禮ヲ取レリ
カク平氏ニ從フモノアレド又之ニ反スルモノ
モアリ反スルモノハ誰ソヤ藤原師光是ナリ師
光ハ阿波郡柿原ノ人ナリト云フ元ト少納言藤

藤原師光

原信西ノ家人ニシテ薙髮シテ西光ト云フ信西
ノ没後、後白河法王ノ北面ノ武士トナリ阿波ノ
在廳左衛門尉師光ト稱ス法王ノ寵ヲ得テ其子
師高ハ加賀ノ國守トナリ一族頗ル盛ナリ
藤原成親等平清盛ガ一族ノ專横ヲ惡ミ之ヲ亡
サント謀ル師光其謀ニ與ル偶マ其子加賀ノ國
守師高ノ目代師經白山ノ僧徒ト事ヲ生ズ僧徒
乃チ之ヲ其本山ナル延曆寺ニ訴フ延曆寺ノ僧
之ト合シテ京師ニ入リ宮闕ヲ犯ス清盛ノ子重
盛三千騎ヲ以テ宮門ヲ衛リテ之ヲ卻ク僧徒等
服セズシテ再舉ヲ圖ル法皇平時忠ヲシテ往テ
之ヲ諭解セシメ師高師經ヲ流ス西光怨恨シ終

ニ叡山ノ坐主明雲ヲ法王ニ讒シ流ニ處ス明雲
平生清盛ト善シ清盛之ガ爲メニ奏シテ之ヲ救
ヘドモ許サレズ既ニシテ山僧等明雲ヲ奪ヒ還
ス法皇怒テ諸將士ニ勅シテ之ヲ討ツ清盛勅ヲ
奉セズ依テ更ニ成親ニ勅ス成親兼テヨリ機會
ヲ待チタルヲ以テ大ニ喜ビ兵ヲ集ム然ルニ其
徒源行綱自ヲ事ノ成ラザルヲ度リ清盛ノ邸ニ
至テ自首ス清盛即チ西光等ヲ捕ヘテ之ヲ殺シ
子師高ヲ誅シ其一族ノ阿波ニ在ル者ハ田口成
真ヲシテ之ヲ殺サシム然レ共尙遺ルモノアリ
テ後源氏ニ從フト云フ(古跡ノ部參看)
平家ノ榮花モ一朝ノ夢ニシテ一千八百四十年

源氏旗ヲ舉

ノ

頃ヨリ以來神人共ニ平家ヲ惡ムノ機ニ乗テ源ノ頼朝兵ヲ東國ニ舉ケ木曾義仲北國ニ起リ東北ノ諸源氏爭テ之ニ應ジケレバサシモノ平家モ京師ヲ守リ得ズ安德帝ヲ奉シテ南海ニ漂泊シ讃岐ノ屋島ニ據ル

義經勝浦

壽永三年正月十三日(一千八百四十四年)頼朝弟義經平軍ヲ一谷ニ破リ進メ攝津ヨリ風波ヲ冒シテ十六日勝浦郡小松島浦沿岸ニ到着ス此浦頭ノ守將ハ阿波民部太輔成良ノ伯父櫻間外記太夫良連ニシテ三百餘騎ニテ固メタル共源兵直ニ之ヲ破リ進メ成良ノ弟櫻間介良遠ノ守ル本庄ノ營ヲ襲フテ之ヲ降メ天神山ノ壘(新

居見村)ニハ師光ノ第六子藤原近家(近藤六ト稱ス)之ヲ守ル義經ノ臣伊勢義盛説ヒテ之ヲ下ス(此事源平盛衰記ト少シク異ナリ阿波志ニヨル)勝浦地方既ニ平キケレバ源軍ハ西須賀山ヨリ阿津伊地越ヲ經テ觀音寺ヲ過ギ吉野川ヲ渡リテ大坂ヲ越ヘ讃州ニ至リ平軍ヲ八島ニ破リテ遂ニ之ヲ長門ニ亡ス此時田口成良ノ長子教能伊豫ニ入り河野氏ヲ攻メテ屋島ニ趣クノ途中ニ義盛之ヲ襲シテ伴リテ曰ク叔父(良遠ヲサス)ハ既ニ勝浦ノ軍ニ没シ家父亦我ニ降レリ子家父ト相見ルヲ欲セザルカト教能驚キテ乃チ降ル是ニ依テ其父成良

ヲ召ス成良亦下ル此ニ於テ當國ノ宗族大抵源氏ニ屬ス

阿府史ニ曰ク壽永元曆ノコロ阿波ノ國司櫻間民部重能ナルモノアリ此人ハ姓ハ紀氏先祖ハ承平天慶ノ頃阿波介國風ノ執事櫻間文治行直ノ末葉ナリ平家盛ナリシ片被官ノ如ク召シ仕ハレ大相國入道清盛下知シテ攝州武庫ノ浦ヲ西國通船ノ湊ニ致スベシトテ重能ニ仰セテ既ニ築キカ、レ共海深ク岸崩レテ日間ヲ取リヌ清盛人柱ヲ入ル可シトテ讃州ノ人兩人ヲ重能ニ渡サル時ニ重能仁者ナレハ生ナガラ沈メントテ痛ミテ大ナル筥ヲ

作り人形ヲ造リテ二ツノ筥ヘ別々ニ入レテ多クノ石ヲ入テ海底ニ沈メヌ彼ノ二人ヲ僧ニシテ密ニ助ケントナリ築島ハ阿波一國ノ人ノ力コテ已ニ築キ留メタリ其後平家衰ヘ安徳天皇ヲ護シテ都及ヒ福原一ノ谷ヘ退ク此時讃州板屋ニ内裏ヲ造營セシモ亦民部重能ガ一人ノ了簡ナリ然ルニ元曆ノ年擅浦ニ平家悉ク入水アル日俄ニ民部父子心替リシテ源家ヘ降参セシテ武士ノ本意ニ違フトテ世々ノ誹リニナルコソ悲シケレ民部重能深ク思慮シテセメテ天子ヲ助ケ奉ント了簡シテ阿波三好美馬麻植三郡ノ與山ニ祖谷小屋

平ト云フ地アリ此所ニ御幸ナラシメシハ元
曆元年ノ冬十二月ナリ翌春ニ平家滅亡シ玉
フ是ニ依テ民部父子耻辱ヲ願ミズ安德帝ノ
爲メニ汚名ヲ耻メシテ忠勤ヲ勵シナリ古ハ
小屋内裏ト云ヒシガ訛テ小屋平ト云フト

付 祖谷誌

地勢

祖谷ノ地勢ハ四囲ミナ山ヲ壁トシ東西十三里
南北七里ト稱ス二千尺以上ノ高地ニシテ山谷
相交リ雲深ク霧濃ク隣間左右絶壁ヲナシテ橋
梁ヲ架ス可ラズ往々白口蔓ヲ編ミテ橋トス交
通ノ不便想フ可シ分テ東西兩祖谷トス山中ヲ
天地陰陽ニ形ドリ巡回ノ月數ヲ表シ東ハ十二

開關

名ニ定メ月ノ中節二十四季ニ形ドリ西ニ二十
四名ヲ定ム故ニ三十六ノ村々皆名ノ字ヲ付ク
方今東西各人家九百戸アリ
此山中ノ開關ヲ原スルニ祖谷山人相傳ヘテ曰
ク古ヘ「るいらみこと」ト稱スル巫覡來リテ土人
ニ耕耘機織ノ事ヲ教フト史ヲ按ズルニ續日本
紀ニ天平勝寶四年(紀元一千四百十三年)京師ノ
巫覡十七人ヲ捉ヘテ土佐等ノ遠國ヘ流ス云々
トアリ(年長翁ノ説)蓋シ祖谷山ノ形勢ヲ考フル
ニ吉野川ノ流ニ沿フテ土佐ニ鳥途ヲ通ズ然ラ
バ即チ土佐ヨリ移殖シ又土佐ヨリ巫覡ノ來リ
テ此山中ヲ開キシガ桃源ヲ尋ヌル古人ナク山

中自ラ別天地ヲナシタリ其後平氏ノ亡ブルヤ其族平國盛來リテ此山中ニ投シ世ヲ忍ビタリ其裔今存シテ阿佐ト稱ス是ニ依テ國盛ノ臣族等主從一小天地ニ蟄居シテ山中ノ開化大ニ進ム之ト同時ニ山城谷モ亦平氏ノ遺民ノ住スル所トナリタリト云フ

第八章 地名考證

第一 阿波國郡數沿革考

同書ニ曰ク郡ノ數ソノカミニハ美馬、阿波、麻植、板野、名方、勝浦、那賀ノ七郡ナリシヲ貞觀二年三月二日(一千五百二十一年)美馬ノ郡ヲ割テ三好郡ヲ置レシヨシ三代實錄ニ見ユ寛平八年九月

阿波國郡數

五日(一千五百五十七年)名方ノ郡ヲ分テ東西兩郡トナシタルヨシ類聚三代格ニ見エテ九郡ニナレリ和名抄ニ載スルトコロモ同ク九郡ナリ其後海部郡ヲ置キマタ板野郡ヲ東西ニ分テテ板東ノ郡板西ノ郡ノ二郡トシ名西ノ郡、名東ノ郡ノ中間ニ以西郡ヲ置キ那賀ノ郡ヲ東西ニ分テテ那東ノ郡那西ノ郡トシテスベテハ十三郡ナリシヲ寛文四年四月(二千三百二十四年)台命ニ依テ今ノ十郡ニ定メタマヒシヨシナリヤレハ十三郡ニナリシハイツノ頃ヨリノコトニカ(中略)マッ板東郡、板西郡ハ源平盛衰記元暦二年(一千八百八十五年)二月十七日金仙寺觀音講

ノ條ニ云其日ハ阿波國板東西(按スルニ東西ノ
 間板ノ字ヲ脱スルカ)ヲ打過テ阿波ト讀岐ノ界
 ナル中山ノ山口ノ南ニ陣ヲ取ル云々カク板東
 板西トアレド板東郡板西郡トハナシ又道範阿
 闍梨ガ南海流浪記仁治四年二月十日(一千九百
 ○三年)ノ條ニ阿波國板東郡大寺ニ宿ストアレ
 ハ其ユロハ板東郡板西郡ト稱ヘレコト疑ナシ
 (中略)カ、レハ板野郡ヲ東西ニ分チシハ元曆二
 年ヨリ前ト決ムベシ
 那西郡那東郡ハ木頭村内瀬十二社權現乾元二
 年六月十六日(一千九百六十三年)ノ縁起ニ阿波
 國那西郡那賀山ノ御庄北俣那伊瀬權現トアリ

又同社ニ那西郡〇庄寶德二年(二千百十年)ト銘
 アル金口アリ又高蒲村五体王子權現社ノ棟札
 ニ大日本國阿波國那西郡福谷五体王子御殿嘉
 慶二年戊辰十二月(二千〇四十八年)ト記シタル
 アリテフルク割分シタル郡ナリ是モ乾元二年
 ヲリ前ノ割分ナリ
 以西郡ハフルクモノニミエズ永祿三年初秋下
 旬(二千二百廿年)ト奥書アル阿波國舊士姓氏錄
 元龜三壬申正月(二千二百三十二年)ト奥書アル
 古城記又元龜四酉年二月十八日ト奥書アル古
 城記ナドニ此郡名出タルノミナリ
 又海部郡ハモト那賀郡ノ郷名ナリシヲイツノ

頃割分シテ一郡ヲ建ラレシカ審ラザレド郡實
郡椿地村大谷彌勒菴ニアル碑石ニ彌勒菩薩ノ
像ヲ彫リ下ニ阿波國海部郡福井里大谷奉建之
當國住人安持仕弥勒菩薩壽永四年乙巳正月廿
八日(一千八百四十五年)配願主藤原滿景(南方ノ
豪族カ)ト彫タリサレハ壽永以前ニ建ラレド郡
ナルヲ知ラル云々

第二 板野郡ノ名義

板野郡ノ名義

同書ニ曰ク此郡ヲ板野郡トイフハイニシヘ板
ヲ多ク出セン所ナリシヨリ名ツケシナラソカ
同郡板東村ニ板ガ谷トイフ地アリ又大板小板
ナドイフトコロモアリサレバ此地ナド郡名ノ

發レル所ニモアルベシ年長(本書ノ著者)サキニ
思ヒシハモト板ノ郡ト書來リレヲ延喜ノ制ニ
凡ソ諸國部内ノ郡里等ノ名ハ並ビニ二字ヲ用
ヒ必ズ嘉名ヲ取レトアリシヨリ板野郡ト野ノ
字ヲ加ヘシナルベント考ヘ得タリケニ人ニモ
語リシハ誤ナリ續日本紀稱徳天皇神護景雲元
年(一千四百廿七年)ノ條ニ云三月乙丑阿波國板
野名方阿波等ノ三郡ノ百姓曰云々日本後紀陸
岷天皇弘仁二年(一千四百七十一年)ノ條ニ云フ
六月成辰大僧都傳燈大師位勝悟卒ス法師俗姓
凡直阿波國板野郡人也云々(中略)コレ等ミナ延
喜ノ制ヨリサキニ板野郡ト野ノ字ヲ加ヘテ書

海部郡

シ證ナリ上ニイヘル考ヘノ如クナラハ伊多郡
ナドト二字ニハ書クベケレト板野郡トハカク
マシキナリ野ノ字ハ如何ナルトニカモシ此
ノアタリノ野へ板ヲ多ク出セシユエニ板野ト
イヒシニハアラザルカ又板東村ノ名モ郡ヲ割
分ザリシサキニハ板野村トイヒシモ知ル可ラ
ズスベテコレヲノ説推量説ナレハコ、ロミニ
イヘルナリ

第三 海部郡名考

此郡ハ元來海邊ノ地ニシテ昔時ヨリ漁ヲ事ト
スルモノ、住ム處ナリ故ニ廻喜踐祚大嘗祭式
ニ曰ク鰓四十五編、鰓、鮓十五、細螺、棘甲、石華

等並ニ二十、上郡、潛女^{カクメ}十人所作云々ト
古代ハ漁ヲ業トスルモノヲ海入部ト云フナリ
故ニ後世之ヲ以テ此邊ノ地名トシテ海部ト云
ヒ來リシヨリ又一變シテ海部ト字音ニ轉セシ
ニハアラザルカ或ハ曰ク此地ハ彼ノ長田別命
ノ裔ノ府中海部城ヨリ移リテ住ミシ所ナレバ
之ニ依テ海部ト稱セシヲ遂ニ今ノ字音ノ稱呼
ニ變セシ云々ト

第四 那賀郡ノ名稱考

栗ノ落穂ニ曰ク那賀郡ヲ今ハ奈加ト清音ニ唱
フルトナレドイニシヘハ奈我ト濁音ニ唱ヘシ
ナラシ今書ク賀字ハ清音ニモ濁音ニモ通シ用

フル字ナレト日本書記ノ長邑舊事紀國造本記ノ長國造ミナ奈我ト濁ル音ナリ殊ニ今モ那賀郡ヲ流ル、川ヲナガ川トイヘルモ古ヘヨリナガノ川ト云フ意ニテ呼ビ來リシナルベシ山ニナガ山トイフモアリ云々

第五 阿波郡ノ外五郡ノ名稱考

阿波郡
麻植郡
美馬郡
名東郡
名西郡

阿府史ニ曰ク阿波郡ハ粟ノ日鷲ノ命ノ粟ヲ植エシ地ナルヨリ地ノ名トナリタリ麻植モ同シク麻ヲ植エシ地ヨリ名トナリタリ美馬郡ハ井内谷馬岡ノ神ノ馬ヲ愛シ美キ馬生ズル故ニ起ルナリ名東名西ノ二郡ハ元ト名方郡ト云フ其起リハ郡内ニ美名方ノ社アリ此命ノ御名ヨ

勝占郡

リ名方郡ト名ク之ヨリ轉シテ名東名西郡トナレリ勝浦郡モ亦勝占ノ神社ノ在ス故ニ名ヅクレトナリ

第九章 古跡

上古ヨリ中古ノ未即ナ紀元々年ヨリ一千八百四五十年頃ノ間ニカ、ルモノナリ

第一 名東郡

尼木

府中村ニ尼木ト云フ所アリ昔第十二代景行天皇ノ朝日本武尊ノ王子長田別命當國ニ君臨シ此地ニ國籙ヲ開キ玉フナリ尼木ハ海部城ノ訛ナリ後ニ海部郡會根ニ移リ玉ヒテ棕部又ハ會根、海部等ヲ姓トシ玉フ(海部郡古跡參看)

國司廳

同村ニアリ元正天皇ノ朝養老三年(一千三百七十九年)ヨリ以後國司四五年毎ニ更替セシ屋形ノ跡ナリ

御所ノ内

上八万村ニアリ古此ノ地ニ安曇氏住ス清和天皇實錄ニ云フ貞觀六年八月八日(一千五百廿四年)阿波國名東郡ノ人二品治部卿兼常陸太守資陽親王ノ家令上六位安曇部ノ粟麻呂ニ部ノ字ヲ改メテ宿禰ト賜フ云々トアリ今大谷八万ノ境ヲアツイレ越ト云フハアツミヨ越ノ訛リナルベシ

舌洗ヒノ水

觀音寺村ニアリ元曆二年二月十七日源義經此清水ヲ以テ馬ノ口ヲ洗フト云フ

角瀬川

高崎村ニアリ義經ノ渡リシ所ナリ蓋シ昔住吉村住吉明神ノ前ナル所ヲ云フナリ今ハ其名移リテ高崎村ニアリ

櫻間ノ壘

櫻間東村ニアリ承平中櫻間行直此ニ據ル壽永永曆ノ間田口成良亦此ニ據ル

花園ノ館

花園村ニアリ元曆元年正月平通盛此ニ至ルト平家物語ニアリ蓋シ平氏ノ莊園ニアラザルカ

はちま

源平盛衰記ニ曰ク判官(義經)既ニ纜ヲ解テ船ヲ出ス云々押テ三日ニ漕ク所ヲ只三時ニ阿波國はちま(あまこ)ノ浦ニツ馳セ着ケル云々今ノ八万ノ東方ハ海水ノ波立ツ所ニシテ當時舟着クノ所ナリ(あまこ)ノハ勝浦郡ヘ出ス

阿津伊地越

昔時ハ今ノ如ク勢見山下ヲ過ギテ南方ニ至ル
道路ナク此邊ハミナ海水ノ波打ツ所ナリ故ニ
上八方村ノ此ノ山越道ハ南北交通ノ要路ニシ
テ源ノ義經モ亦コ、ヲ越ヘテ讃岐ニ至リシナ
リ俗ニ今ノ勢見山ヲ以テ義經ノ軍勢ヲ觀シ所
ト傳フルハ誤リナリソハ勝浦郡ノ古跡ヲ參着
セハ明ナリ

第二 名西郡

尼寺村ニアリ聖武帝ノ勅願寺ニシテ國中ノ尼
ノ學文所ナリ男子禁戒ニテ婦人ノミ參詣ス寺
號ヲ法花滅罪寺ト云フ甚ダ大寺ナリ藤原純友
ノ乱ニ燒ミテ其後再興セズ

尼寺

天神

上ノ宮

天神芝原邊ハ古ヘ土師ノ郷ト云フ管原道真ノ
祖清公ノ領田ナリ故ニ後世天神ト云フ
神領村ニアル社ニシテ神代ノ時ノ阿波國ノ神
大宜都比賣ヲ祭ル所ナリ古事記ニ曰ク天神十
二代目ノ神伊邪那岐命伊邪那美命ノ天降リ玉
フヤ此二種ノ神御合マシテ云々(中路)次ニ伊豫
之二名島ヲ生玉ヒキ(此國ヲ經營シ玉フノ意ナ
リ)此島ハ身一ニシテ面四アリ面ゴト二名アリ
故ニ伊豫國ヲ愛比賣ト謂ヒ讃岐國ヲ飯依比賣
ト謂ヒ粟國ヲ大宜都比賣ト謂フ云々蓋シ此大
宜都比賣トハ當國固有ノ酋長ニシテ命ニ服從
シテ國ノ神トナリシモノナラシカ

童學寺

城内村ニアリ里俗傳ヘテ曰ク空海書ヲコ、ニ
學ブト

神領ノ壘

神領村ニアリ田口成良之ヲ築クト云フ

第三 板野郡

白水郎塚

里浦ニアリ日本書記ニ曰ク允恭天皇十四年(一
千〇八十五年)天皇淡路島ニ狩リシ云々(中略)阿
波國長邑ノ海人男狹磯ニ命シテ海底ニ入り大
鯨ヲ獲ラレム男狹磯之ガ爲ニ死ヌ天皇之ヲ哀
レミ玉ヒ墓ヲ作リテ厚ク葬ル云々蓋シ其墓ナ
リト云フ異説アレ共姑ク之ヲ存ス

清少納言ノ

同所ニアリ清少納言ノ墓ト果シテ信ナルヤ保
シ難シ蓋シ里浦ハ其父清原元輔ノ莊園ナレバ

墓

舟隠ノ磯

少納言ノ來リレモ知ル可ラズ少納言ハ一千六
百五十年頃一條帝ノ后ノ女房トナリ枕草子等
ヲ著シ中古才女ノ一人ナリ
堂浦ニアリ平ノ三位中將維盛八島ノ浦ヨリ脱
シテ紀伊ヘ走ラントスルヤ追兵ノ急ナルヨリ
舟師ノ其舟ヲコ、ニ隠セント云フ平家物語ニ
曰ク壽永二年三月十五日御供ニハ與三兵衛重
景石童丸舟ニ心得タレバトテ武里ト云フ舍人
是等三人ヲ召具シ阿波國ユウキガ浦ヨリ舟ニ
乗リ鳴門ノ沖ヲ漕過ギテ紀ノ路ヘ趣キ玉フト
アリ此ノユウキトハ即チ今ノ磯ヲ古ヘ檣々浦
ト云ヘルニヨルナリ

土佐泊

一千五百五十年頃紀貫之ノ土佐國司トナリ其任滿ナテ還ル片船ヲコヽニ停メテ歌ヲ作リテ曰ク「年ゴロヲ。スミシ所ノ。名ニシオヘバ。キヨル波ヲモ。アハレトツミル」

木津神ノ浦

今ノ木津村ノ舊稱ナリ藤原基房ノ再ビ當國ノ國司トナリテ下リケル片舟此邊ニ着キテ其波立ツヲ見テヨム歌ニ曰ク「コツカミノ浦ニ年ヘテヨル波モ同ジ所ニカヘルナリケル」ト蓋シ吉野川下流ノ地木津邊ハ七百餘年以前ハ猶海水ノ波立ツ所ナリ

第四 阿波郡

浦ノ池

浦池村ニアリ此他ニ大俣村及ヒ三好郡池田等

御所

ニアル大池ハ往昔當國ノ國司山田宿禰吉嗣ノ水利ヲ便ニシ旱魃ノ患ヲ防ガノ爲メニ一千五百年頃ニ堀ル所ナリ
柿原村ノ廣永ト云フ所ニアリ阿波ノ在廳左衛門尉藤原師光ノ屋敷跡ナリ治承ノ乱ニ師光ノ嫡子師高ハ尾張ニテ誅セラレ二男師經三男師平ハ京師ニテ誅セラル四男五男等ノ阿波ニ在ルモノハ民部成良平家ノ命ヲ受テ宮河ノ内谷ニテ誅ス六男ハ逃レテ源義經ニ仕ヘ近藤親家七男ハ東國ニ下リ賴朝ニ仕ヘ近藤七ナ

第五 麻植郡

韓人

飯尾村ニアリ上古ニ吳ノ國ヨリ日本ヘ女工ヲ
献ズ其女工等ヲ諸國ニ分チ遣ハシテ神服ヲ織
ラシム當國ヘハ大社三社ニ女工六人來リ忌部
氏ノ支配ニ属シテ世々吳島(今ノ上下島ノアタ
リ)ニ住ム其舊跡ナリ

忌部社

山崎村ニアリ即チ天日鷲命ヲ祭ル命ノ子孫國
造ヲ罷メテ以來世々祭儀ヲ司リ大嘗會等ノ大
祭ニハ織ル所ノ麤布ヲ奉シテ入京シ神祇官ノ
命ヲキ、タルヲ久シ然ルニ戰國ニ至テ此事絶
ヘタルト共ニ忌部氏モ世ニ聞ヘズ

高越寺

川田西村ニアリ寺ノ私記ニ曰ク上略、千茲阿波
國麻植郡内摩尼珠山、高越寺、天智天皇御宇(一千

學校ノ跡

三百二十四年頃)役、行者、開基、能住靈神大和國與
吉野藏王權現、一体分身、本地別体、千手千眼大悲
觀世音菩薩、云々(中略)山容如如意寶珠、因以号摩
尼珠山、高越、雲影、聳、空中、故呼謂高越、云々(中略)弘
仁天皇御宇密祖弘法大師有秘法修行願望參詣
此山云々トアリ
或人曰ク此山下ヲ東流スル大河ハ大和ノ吉野
川ニ似タリ故ニ行者之ヲ名クテ亦吉野川トイ
フト
學村ニ在リ昔シ忌部氏盛ナル片此地ニ小學校
ヲ設ケ儒生、文章生、俗人生ノ諸國學ヲ教導アリ
シ舊跡ナリ今此村ニ古ノ樂ノ大鼓ヲ傳フト

忌部ノ郷

山崎ヲ中心トシテ麻植郡ノ過半ヲ占ム忌部氏一族ノ領地ナリ續日本紀ニ曰ク景雲二年七月(一千三百六十五年)阿波國麻植ノ人外從七位下忌部連方麻呂從五位上忌部連須美等十一人ニ姓ヲ宿禰ト賜フ大初位下忌部ノ越麻呂等十四人ニ姓ヲ連ト賜フト

天長五年(一千四百八十四年)忌部友主ハ伊勢神廟ノ奉幣使ニ與リ貞觀八年(一千五百廿六年)高善京師應天門ノ災災ヲ祭ル

右ノ如ク忌部氏ハ世々神儀官トナリテ頗ル榮ヘテ戰國ノ時ニ至ル迄大祭ノ節ハ荒妙ノ御表ヲ上レリ今ノ早雲氏ハ其裔ナリト云フ

第六 美馬郡

絹織ノ窟

西端山ニアリ昔時綾羅ヲ織リシトニ縁ナキカ試ニ記ス

祖谷ノ平氏

平ノ教盛ノ子國盛元曆二年此山中ニ來リ阿佐名ニ居ル之ヲ阿佐久保二氏ノ祖トナス國盛ノ此山中ニ投ズルヤ同時ニ其臣下ヲ率ヒ來リテ祖谷山中ノ開化ヲ進メシナラソ

半平山

壽永中緒方三郎維義義經ニ從ヒ平氏ヲ征ス其後文治年中義經ノ敗走スルヤ維義兵廿四人ヲ從ヘ來テ半平山ニ隠ル

惠伊羅王子

相傳フ伊豫ヨリ來リテ祖谷山ヲ跡ニ開キタリト墓ハ閑定名ニアリ

ノ墓

第七 三好郡

雲邊寺

白地村ニアリ延暦八年(一千四百四十九年)以來ノ古寺ニシテ其扁額巨鯨山雲邊寺ノ六字ハ空海ノ書ナリト云フ

古池

池田村ニアリ承和十三年(一千五百〇六年)當國ノ國司山田古嗣ノ堀ル所ナリ

山城谷

壽永年中平氏ノ臣族ノ來奔セルモノ各田宅ヲ構ヘテ一郷ヲナスト云フ

第八 勝浦郡

恥敷峰ハシカンガミ

西須賀村山中ニアリ義經ノ八島ニ赴ク道ナリ往昔ハ此下ハ入海多ク道路山上ニアリ此所ニ甲岩アリ義經ノ甲ヲ脱ギ櫛ケツリテ其ノ水ニ

平家ノ落橋

面ヲ照シテ鬢髮ノ乱レタルヲ耻ヅ故ニ名クト云フ

裝束原

同村往來ノ側ニアリ櫻間能遠勝浦川ニテ義經ノ爲メニ一戦ニ敗レテ此地ヲ退ク所ナリト芝生村ニアリ義經ノ此ニ至テ船中ノ裝束ヲ更メシ所ノ名殘リナリト

旗山

田野村ニアリ議經ノ上陸セル後其兵士ノ船所々ニ着岸スルヲ以テ此小丘ニ上リテ旗ヲ立テ軍勢ヲ聚メシナリト云フ

勢潜岩シケンガ

赤石村ノ山際ニアリ亦義經ノ軍勢赤石ノ磯ヨリ上リ此岩ノ中ヲ通りシナリト云フ今ハ道アレ共昔ハ磯ニテ道ナカリシナリ

蓋シ義經ノ此渡海ハ大風ヲ冒シテノトナレバ
芝山ヲ前後ニ見テ船ヲ進メシヲ以テ今ノ小松
島ノ邊ヨリ八万アタリヘ舟着シナリ「あまこ
浦」トハ以上ノ諸村ノ昔時ノ郷名ナリ

大みこ
小みこ

大原村芝山ノ磯ニ在リ土俗云フ上古此處ニタ
處ヘ春彦命ノ御船「大みこ」ニ着キ小呼ハ「小みこ」
ニ着キ玉フト其名未ダ詳ナラス
又興ク濱ト云フ所大原ノ海邊ニアリ前人ノ上
陸シテ籠ニ乗リ更ヘ玉フ所ヲ「かど」ト云フナリ
ト此事ハ他ニ縁故ナキニ似タレ共後ノ探求者
ノ爲メニ記ス

第九 那賀郡

小鍛冶谷

仁宇谷ニアリ小鍛冶屋鋪ト云フモノハ谷内ニ
アリ往昔一條帝寛弘年中(一千六百六十七年頃)
勅アリテ阿波國那賀郡大龍寺大破ニ及ブヲ以
テ再興アラントテ東寺ノ前住僧宗範僧正大工
頭近藤雅樂介鍛冶頭三條小鍛冶宗近ヲシテ之
ヲ再興セシム此等ノ人々永ク當地ニ住セシト
ナリ又他書ニ曰ク大龍寺ノ再興ハ嘉保二年(一
千七百五十五年)堀河帝僧ノ長範ニ勅シテ之ニ
當ラシムト彼レコレ相違アリイツレニヤ
相傳フ桓武帝藤丈山ニ勅シテ之ヲ作ラシムト
然ラハ一千四百四五十年頃創セシ古刹ナリ
大龍寺縁起ニ曰ク(前略)干時延暦十七年五月日

大龍寺

春日部屯倉

國學ノ跡

大歳

應仁桓武天王之御願阿波國司藤原朝臣丈山謹承
 繪旨建當伽藍爰大師白彫刻諸佛諸尊數体之形
 像安置山上山下五所之伽藍云々
 宮倉村葉浦ノ春日社ノ邊ニ遺跡アリト云フ安
 閑天皇ノ朝(一千百九十四五年)ニ阿波國春日ノ
 屯倉ヲ置カレシマリ是レ其遺跡カ
 學原村ニアリ蓋シ往昔南方諸郡ノ郷校ナラン
 第十 海部郡
 淺川村ニアリ源賴政ノ孫伊豆守賴綱(一ニ有綱
 ニ作ル)壽永元年源賴朝ノ命ヲ承ケテ平氏ノ徒
 運池家綱等ヲ土佐ニ擊ツ其後義經兄賴朝ト不
 和ヲ生ズルヤ賴綱義經ニ黨シ文治元年出奔シ

阿部浦

管根

ヲ攝津ヲ發シ風ニ遇ヒ飄蕩シテ淺川ニ至ル時
 ニ歳暮ニシテコヽニ其歳ヲ守ル故ニ大歳ト云
 フ之ヲ木岐濱二氏ノ祖トナス
 壽永年中ニ阿部時任トイフモノ初メ平氏ニ属
 シ後宇留島十郎元有ト共ニ源氏ニ属スト云フ
 蓋シ南方ノ豪族ナリ
 高園村ハ根元ハ管根ト云ヒシナリ三代實錄ニ
 曰ク陽成天皇ノ朝元慶五年(一千五百四十一年)
 阿波國那賀郡ノ人從七位上椋部夏影從八位上
 椋部吉磨等本姓管根ノ連ニ復ストアリ按ズル
 ニコノ皆阿波ノ君ノ末葉ナリ平語ニ曰ク阿波
 ノ國安摩六郎忠景平氏ニソムク云々コレ亦阿

波ノ君ノ末葉ニシテ本篇ニ述ブル如ク國造等ノ子孫地方豪族トナル者則チ是ナリ、以上ノ古跡ハ主トシテ阿府史古跡部ヨリ抜キ取リ其信偽ヲ詳ニセザルモノアリト雖モ後ノ學者ノ發明ヲ期シテ之ヲ歷舉シタリ幸ニ取捨スル所アレ

沿革年表

歴代	帝名	年・號	年數	即位紀元	當國ノ主權者及ヒ沿革事蹟(付)本邦ノ大事項
第一代	神武			元年	日鷲ノ命(忌部氏ノ祖)國造トナル
第二代	綏靖			八四	日鷲ノ命ノ子孫國造タリ
第三代	安寧			一一三	國造同上
第四代	懿德			一五一	國造同上
第五代	孝昭			一八六	國造同上
第六代	孝安			二六九	國造同上
第七代	孝靈			三七一	國造同上
第八代	孝元			四四七	國造同上
第九代	開化			五〇四	國造同上
第十代	崇神			五六四	國造同上。十一年始メテ徵稅ノ法ヲ布

第十一代	垂仁	六三二	國造同上。三十四年諸國ニ令メテ池溝ヲ開ク
第十二代	景行	七三一	國造同上
第十三代	成務	七九一	國縣邑里ノ制ヲ立ツ。長田別ノ命當國ノ國造トナル
第十四代	仲衰	八五二	國造ハ長田別ノ命ノ子孫ナリ
	神功皇后	八六一	國造同上。同年皇后新羅(朝鮮ノ一部)ヲ親征ス
第十五代	應神	九三〇	國造同上。十五年漢學渡來ス。吳ノ女工ヲ求ム
第十六代	仁德	九七三	國造同上。三年諸國ニ詔シテ三年ノ課役ヲ免ス
第十七代	履仲	一〇六〇	國造同上。始メテ諸國ニ史官ヲ置ク
第十八代	反正	一〇六六	國造同上
第十九代	允恭	一〇七二	國造同上
第二十代	安康	一一一四	國造同上
第二十一代	雄略	一一一七	國造同上。十五年諸國ニ桑ヲ植エシム朝鮮ノ諸美術師歸化ス

第廿二代	清寧	一一四〇	國造同上
第廿三代	顯宗	一一四五	國造同上
第廿四代	仁賢	一一四八	國造同上
第廿五代	武烈	一一五九	國造同上
第廿六代	繼體	一一六七	國造同上
第廿七代	安閑	一一九四	國造同上。春日部ノ屯倉ヲ置ク
第廿八代	宣化	一一九六	國造同上
第廿九代	欽明	一二〇〇	國造同上。十二年佛教渡來ス
第三十代	敏達	一二三二	國造同上
第卅一代	用明	一二四六	國造同上
第卅二代	崇峻	一二四八	國造同上
第卅三代	推古	一二五三	國造同上。厩戸皇子佛ヲ信ス是ヨリ佛法漸ク弘ムル

第卅四代	舒明			一、二八九	國造同上
第卅五代	皇極			一、三〇九	國造同上
第卅六代	孝德	大化	五	一、三〇五	國造同上。二年國造稻置ヲ廢シ國司ヲ置ク
第卅七代	齊明	白雉	五	一、三一五	長田別命ノ裔尙繼ギテ國司トナル
第卅八代	天智			一、〇六六	國司阿波真人廣純(長田別命ノ裔)當國ノ兵ヲ率ヒテ百濟ヲ討ク
第卅九代	弘文			一、〇七二	國造同上新制度益整フ
第四十代	天武	朱鳥	一三	一、三三三	國造同上。路ノ迹見南海道使者タリ
第四十一代	持統	朱鳥	一三	一、三四七	國造同上
第四十二代	文武	大寶	四	一、三五七	國造同上。新制度ノ脩成アリ
第四十三代	元明	和銅	七	一、三六八	國造同上。當國初メテ絞羅ヲ織ル。銅錢ヲ鑄ル
第四十四代	元正	養老	七	一、三五七	國造同上。諸國ニ學校ヲ置ク

第四十五代	聖武	神龜	二〇五	一、三八四	國司同上。十三年始メテ國分寺ヲ置ク是ヨリ當國佛法漸ク盛ナリ
第四十六代	孝謙	天平勝寶	二八	一、四〇九	國司ハ豐野直人篠原ナリ
第四十七代	淳仁	天平寶字	七	一、四一八	菅生王、葛井根王、紀次テ國司タリ
第四十八代	稱徳	天平神護	一二	一、四二五	中臣常國司タリ
第四十九代	光仁	寶龜	一一	一、四三〇	大伴村上、大中臣宿奈麻呂、等國司タリ藤原弓主國司タリ
第五十代	桓武	延暦	二四	一、四四二	川村王、雄倉王、村國息繼、和氣廣世、藤原道雄、秋篠安人、等國司トナリ紀廣河介トナル。十二年都ヲ山城ニ遷ス、大龍寺ノ建立
第五十一代	平城	大同	四	一、四六六	藤原眞夏、田口息繼相次テ國司タリ
第五十二代	嵯峨	弘仁	一四	一、四七〇	當宗家主、佐伯長繼、菅原清公、小野峰守等國司タリ。空前眞言宗ヲ弘ム
第五十三代	淳和	天長	一〇	一、四八四	藤原茂主、善道眞貞國守タリ
第五十四代	仁明	承和	一四	一、四九四	藤原富士麻呂、和氣仲世、長峯高名守タリ三島島繼、續岐永直權様タリ山田古嗣介トナル阿波美馬ノ池澤ヲ作ル

第六十一代	第六十代	第五十九代	第五十八代	第五十七代	第五十六代	第五十五代	
朱雀	醍醐	宇多	光孝	陽成	清和	文德	
天承 慶平	延長 延喜	寬仁 平	仁 和	元 慶	貞 觀	天齊 安衡	嘉祥
一七	二八	九一	三	八	一八	二二三	三
一、五九一	一、五五八	一、五四八	一、五四五	一、五三七	一、五一五	一、五一一	一、五〇八
藤原純友、當國ニ乱入ス、藤原國風討テ之ヲ退ク	藤原懷忠、藤原守義、藤原範永守タリ	橘秘樹、藤原實賴等國司タリ此時代ノ其他ノ國司未詳ナリ、藤原道真藤原時平ノ讒ニ依テ流サレ、此頃國內盜賊徘徊ス	源嘉生、紀敏貞、源兼似、源由道守タリ藤原有穗守タリ。名方郡ヲ割テ東西兩郡トス	平正範、藤原安嶺、藤原直方、藤原弘蔭等守タリ	小野權生、藤原有實、權介タリ、藤原道前椽タリ、藤原積善權守タリ、藤原氏天皇ヲ廢ス	源維範等介タリ、美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置ク	茂世王、藤原與世、藤原基經、藤原三直、源與等守タリ、藤原有真、藤原忠宗、藤原維範等介タリ、美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置ク

第六十二代	第六十三代	第六十四代	第六十五代	第六十六代	第六十七代	第六十八代
村上	冷泉	圓融	花山	一條	三條	後一條
天曆 應和	天安 和	天祿 貞元	天延 元觀	永延 正曆	長德 弘保	寬仁 壽安
一〇	二	三三	二五	二	五	四
一、六〇七	一、六二九	一、六二八	一、六四五	一、六四七	一、六七二	一、六七七
櫻間氏等漸ク威ヲ振初メタリ	國司未詳	國司未詳	國司未詳	國司未詳	源氏人心ヲ東國ニ收ム	國司同上

阿波國文明小史上卷終

第八十一代	安德	養和	壽永	四一	一、八四一	平氏西海ニ走ル、義經勝浦ヨリ上陸シテ平氏ヲ長門ニ亡ボヌ阿波ノ豪族源氏ニ屬ス
第八十代	高倉	承安	治安	四二	一、八二九	平親國、藤原朝方守タリ、藤原兼宗、藤原隆介タリ。諸國ノ源氏兵ヲ擧グ

百二十二

明治廿四年六月廿三日印刷

明治廿四年六月廿三日出版

定價金貳拾五錢

德嶋縣德嶋市大字富田浦町
二千五百五十三番屋敷寄留平民

著者 廣嶋秀太郎

德嶋縣德嶋市大字西新町
四百八十九番屋敷平民

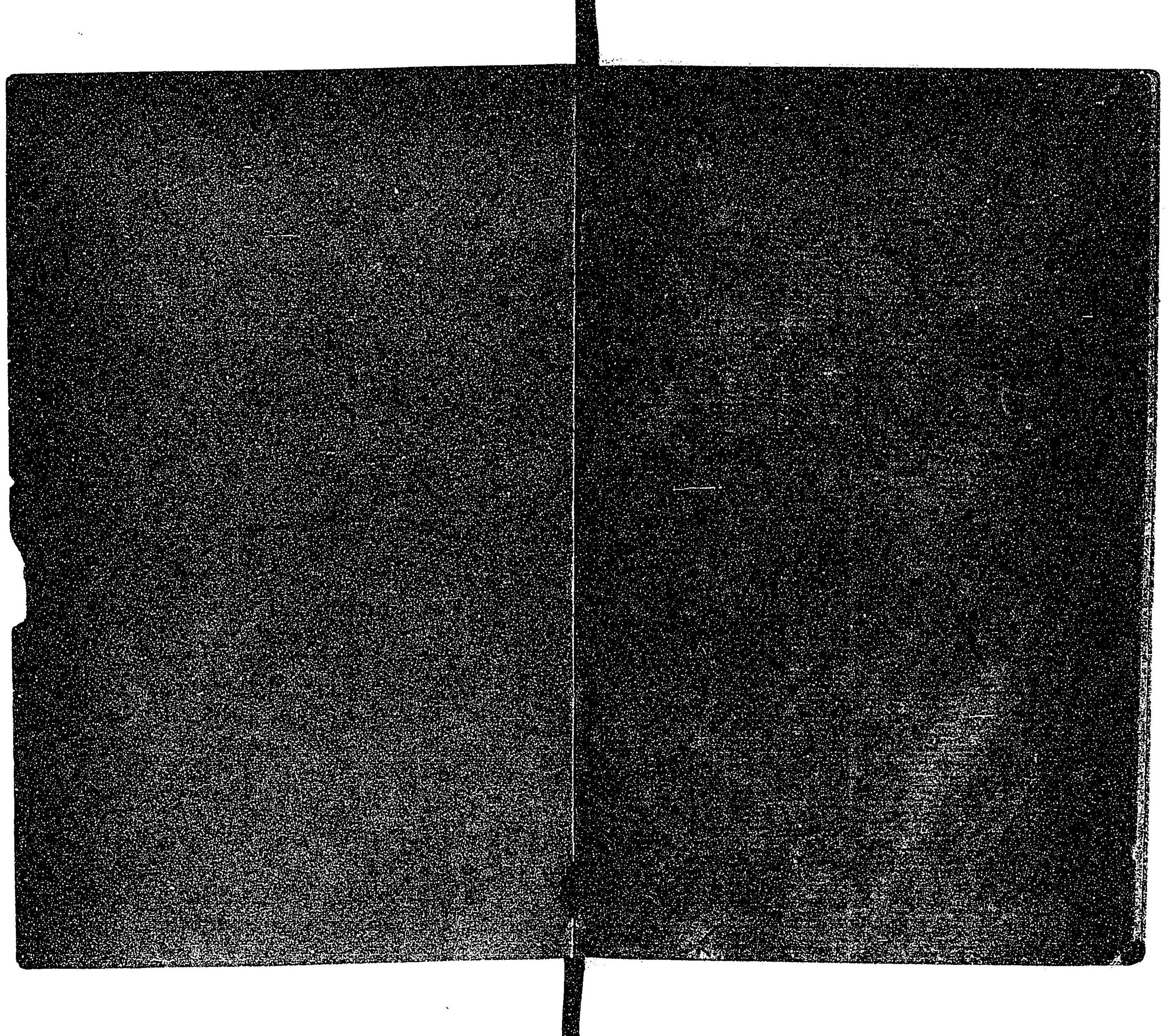
發行兼印刷者 黑崎精二

德嶋縣德嶋市大字船場町
五十一番屋敷

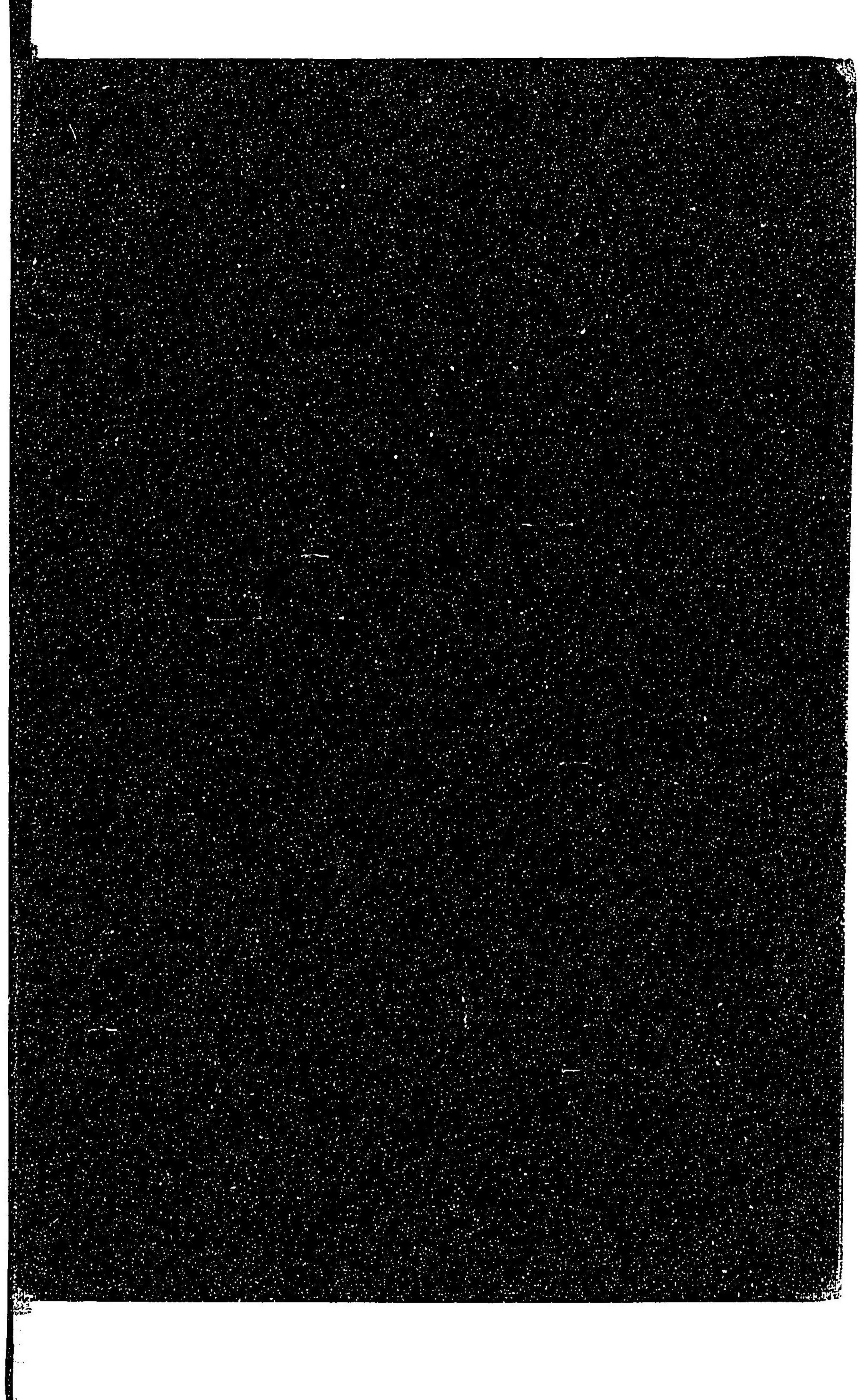
印刷所 鳴門新聞社

版權登錄

68
2
53



68
53



68

53

026032-000-7

68-53

阿波国文明小史 上卷

広島 秀太郎 / 著

M24

ADC-3675



